



WebSphere Everyplace Suite

ご使用に際して

バージョン 1.1





WebSphere Everyplace Suite

**ご使用に際して**

*バージョン 1.1*

## ご注意

本書の情報およびそれによってサポートされる製品を使用する前に、91ページの『特記事項』に記載する一般情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Everyplace Suite バージョン 1 リリース 1 モディフィケーション・レベル 1 (AIX 用) およびバージョン 1 リリース 1 モディフィケーション・レベル 2 (AIX および Solaris 用) (5765-E59)、エンタープライズ版 (5697-G53)、サービス・プロバイダー版に適用されます。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

原 典：	VWES-GT11-00 WebSphere Everyplace Suite Getting Started Version 1.1
発 行：	日本アイ・ピー・エム株式会社
担 当：	ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2000.11

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体\*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注\* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、  
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation and others 2000. All rights reserved.

Translation: © Copyright IBM Japan 2000

# 目次

本書について	vii
対象読者	vii
本書の構成	vii
規則	viii
コンポーネント名	viii
<b>第1章 IBM WebSphere Everyplace Suite の紹介</b>	1
Everyplace Suite コンポーネント	1
Everyplace Suite 展開例	3
コンテンツ・プロバイダー -- スタートアップ・ポータル会社	3
企業の顧客 -- 運送会社	4
インターネット・サービス・プロバイダー -- パーベイシブ・サポート	4
コンポーネントの資料の検索	5
<b>第2章 Everyplace Suite のインプリメント計画</b>	7
Everyplace Suite コンポーネントの理解	7
Everyplace Suite メイン・コンポーネント	7
サポート・コンポーネント	13
Everyplace Suite のインストール・モデル	15
インストール前の計画	18
SecureWay Directory のインストール計画	18
Authentication Server の構成パラメーター	22
Tivoli Personalized Services Manager インストール前の要件	23
システム要件	25
コンポーネントの前提条件	25
ハードウェア要件およびソフトウェア要件	26
サポートするデバイスおよびネットワーク・タイプ	33
そのほかの計画情報	35
既存製品の Everyplace Suite 環境への移行	35
<b>第3章 Everyplace Suite のインストール</b>	37
README ファイルの最新情報	37
インストール前のチェックリスト	37
インストール・イメージの作成	38
インストール CD のディレクトリ構造	39
Oracle database ソフトウェアのインストール	40
AIX での Tivoli Oracle integration パッケージのインストール	40
Solaris での Tivoli Oracle integration パッケージのインストール	45
インストール・プログラムの開始	48
製品 CD からのインストール	48
ファイル・システムからのインストール	49
Everyplace Suite のインストール	49
インストール・ステップ	50

インストールの進行 . . . . .	55
障害追及 . . . . .	55
デバイス・クライアントおよびアプリケーションのインストール . . . . .	56
Everyplace Wireless Gateway . . . . .	56
Tivoli Personalized Services Manager (デバイス・マネージャー機能) . . . . .	56
MQSeries Everyplace . . . . .	56
Everyplace Synchronization Manager . . . . .	57
<b>第4章 Authentication Server の構成 . . . . .</b>	<b>59</b>
SecureWay Directory における Authentication Server 情報の構成 . . . . .	59
デバイスおよびネットワーク・タイプの構成 . . . . .	66
リバース・プロキシとしての認証プロキシの構成 . . . . .	67
宛先変更に必要な追加構成 . . . . .	69
Authentication Server が RADIUS および active session table server にアクセスで きるようにする . . . . .	69
Solaris の認証プロキシ・エラー・メッセージ . . . . .	71
操作タスクの実行 . . . . .	71
<b>第5章 Everyplace Suite の構成および管理 . . . . .</b>	<b>75</b>
Everyplace Suite コンポーネントの資料の検索方法 . . . . .	75
Everyplace Authentication Server . . . . .	75
Everyplace Wireless Gateway (バージョン 1.1). . . . .	75
MQSeries Everyplace for Multiplatforms (バージョン 1.1) . . . . .	76
Edge Server Load Balancer (バージョン 1.0) . . . . .	76
Edge Server Caching Proxy (バージョン 1.0) . . . . .	76
Tivoli Personalized Services Manager (バージョン 1.1) . . . . .	76
WebSphere Transcoding Publisher (バージョン 1.1.2). . . . .	78
Everyplace Synchronization Manager (バージョン 1.1) . . . . .	78
IBM DB2 ユニバーサル・データベース -- エンタープライズ版 (バージョン 7.1) . . . . .	78
WebSphere Application Server -- スタンダード版 (バージョン 3.5). . . . .	78
IBM HTTP Server (バージョン 1.3.12) . . . . .	79
SecureWay Directory (バージョン 3.2) . . . . .	79
加入者の登録およびモバイル機器の追加 . . . . .	79
SecureWay Directory パスワードの変更 . . . . .	80
active session database に対する Tivoli Personalized Services Manager の構成 . . . . .	81
Everyplace Wireless Gateway が RADIUS および active session table server にアクセ スできるようにする . . . . .	82
Gateway リソース作成中の構成 . . . . .	82
Gateway リソース作成後の構成 . . . . .	83
Everyplace Wireless Gateway に対するユーザー区分フラグの設定 . . . . .	84
Everyplace Administration Console の使用 . . . . .	84
Everyplace Administration Console の開始 . . . . .	85
コンポーネント管理コンソールの立ち上げ . . . . .	85
HTTP Server および Caching Proxy のポート番号の変更 . . . . .	86
トラブルシューティング . . . . .	86

<b>第6章 Everyplace Suite</b> コンポーネントのアンインストール . . . . .	89
アンインストール・プログラムの開始 . . . . .	89
コンポーネントの選択およびアンインストール . . . . .	89
アンインストールおよび SecureWay Directory. . . . .	90
<b>特記事項</b> . . . . .	91
商標 . . . . .	92
<b>索引</b> . . . . .	95





---

## 本書について

本書には、IBM® WebSphere™ Everyplace Suite (以下、Everyplace Suite) の計画、インストール、および構成に関する情報が記載されています。Everyplace Suite は、無線電話、携帯情報端末 (PDA)、およびモバイル・コンピューターなどのパーベイシブ・デバイスのオンライン情報への接続性をサポートしている、ソフトウェア・コンポーネントの統合モジュールです。本書は、特定の Everyplace Suite コンポーネントに関する資料は提供していません。個々のコンポーネントについての資料を探す場合は、75ページの『Everyplace Suite コンポーネントの資料の検索方法』を参照してください。

---

## 対象読者

本書は、Everyplace Suite のコンポーネントのインストールおよび構成を担当するシステム管理者を対象としています。また、Everyplace Administration Console を使用し Everyplace Authentication Server を管理している個人も対象としています。これらの対象読者は、AIX または Solaris オペレーティング・システムを実行しているインターネット・サーバーのサポートを経験している必要があります。

---

## 本書の構成

本書は、以下の章で構成されています。

- 1ページの『第1章 IBM WebSphere Everyplace Suite の紹介』では、Everyplace Suite およびそのコンポーネントについて説明しています。
- 7ページの『第2章 Everyplace Suite のインプリメント計画』には、計画について、およびハードウェアとソフトウェアの各要件についての情報が記載されています。
- 37ページの『第3章 Everyplace Suite のインストール』には、Everyplace Suite のインストールについての詳しい説明が記載されています。
- 59ページの『第4章 Authentication Server の構成』には、Everyplace Authentication Server の構成についての詳しい説明が記載されています。
- 75ページの『第5章 Everyplace Suite の構成および管理』には、Everyplace Suite の管理および構成について、また、Everyplace Administration Console の使用についての情報が記載されています。
- 89ページの『第6章 Everyplace Suite コンポーネントのアンインストール』には、Everyplace Suite または Everyplace Suite の各コンポーネントのアンインストールについての情報が記載されています。

---

## 規則

本書では、次の規則が使用されています。

ディレクトリー・パス、ファイル名、およびコマンド行コマンドは、以下のフォントで表示されています。 `/pathname/directory/command`

本書の表題および Web サイトの URL およびリンクは、次のようなイタリック体で表示されています。 *www.website.com/webpage*

ボタン、テキスト・フィールド、およびその他の選択可能なエンティティは、**太字**で表示されています。

## コンポーネント名

Everyplace Suite は、多くのコンポーネントおよびサポートしているコンポーネントを含んでいます。次のリストには、Everyplace Suite を構成しているすべてのコンポーネントの完全なプロダクト名と本書で使用している短縮名が記載されています。

- **WebSphere Everyplace Suite**  
Everyplace Suite
- **Everyplace Authentication Server**  
Authentication Server
- **Everyplace Wireless Gateway**  
Wireless Gateway
- **MQSeries<sup>®</sup> Everyplace for Multiplatforms**  
MQSeries Everyplace
- **WebSphere Edge Server Caching Proxy (Web Traffic Express)**  
Edge Server Caching Proxy, Caching Proxy
- **WebSphere Edge Server Load Balancer (Network Dispatcher)**  
Edge Server Load Balancer, Load Balancer
- **Tivoli<sup>®</sup> Personalized Services Manager**  
TPSM
- **WebSphere Transcoding Publisher**  
Transcoding Publisher
- **IBM DB2 ユニバーサル・データベース™**  
IBM DB2 UDB, DB2
- **Everyplace Administration Console**  
Administration Console
- **IBM HTTP Server**

HTTP Server

- **SecureWay® Directory**
- **WebSphere Application Server**

Application Server

- **Everyplace Synchronization Manager**
- Synchronization Manager



---

## 第1章 IBM WebSphere Everyplace Suite の紹介

IBM WebSphere Everyplace Suite は、ソフトウェア・コンポーネントの統合モジュールです。これらのソフトウェア・コンポーネントは、他の無線デバイスや従来の接続されたデバイスの中で、携帯電話、携帯情報端末 (PDA)、モバイル・コンピューターなどの多種多様なパーベイシブ・デバイスからオンライン情報へ、信頼性の高いアクセスを提供します。また、Everyplace Suite コンポーネントは、接続性、セキュリティー、コンテンツ処理、最適化、および加入者とデバイスの管理のソリューションを提供します。

Everyplace Suite は、次のようなお客様を対象としています。

- 自社のイントラネット・アプリケーションのパーベイシブ・デバイスへの拡張を模索している**企業の顧客**。これらのデバイスは、ジョブ・タスク・デバイス (荷物配達の詳細および追跡のためのワイヤレス・デバイス等) や多機能デバイス (ラップトップ・コンピューターおよび PDA 等) を含みます。これらのお客様は、選び抜かれたインターネット・コンテンツをユーザーに配信したいと希望しているかもしれません。
- データおよびアプリケーションの消費者への配信を希望する**コンテンツ・プロバイダー**。これらのお客様には、インターネット商取引、金融、情報サイト、およびインターネット・ポータルを提供している企業が含まれます。
- 消費者および企業ユーザーへの接続サービスの提供を希望する**インターネット・サービス・プロバイダー**。

---

### Everyplace Suite コンポーネント

各 Everyplace Suite コンポーネントは、パーベイシブ・コンピューティングの接続性の拡張において、異なる機能を実行します。Everyplace Suite コンポーネントは、対応するコンポーネントを通じて以下のサービスを提供します。

#### 接続性

- **Everyplace Wireless Gateway:** ワイヤレス環境における IP およびワイヤレス・アクセス・プロトコル (WAP) の各アプリケーションを実行可能にする通信プラットフォームを提供します。
- **Everyplace Authentication Server:** Everyplace Wireless Gateway を介さずに接続するデバイス用の Everyplace Suite ドメインへの入り口点の役割をします。
- **MQSeries Everyplace for Multiplatforms:** デバイスおよび MQSeries ファミリー・プラットフォーム間の保証済みメッセージ機能を提供します。
- **Everyplace Synchronization Manager:** モービル・コンピューティング・デバイスが、リモートで、Microsoft Exchange、Lotus Notes または DB2 データベースなどのアプリケーションにリンクできるようにします。

## セキュリティ

- **Everyplace Wireless Gateway:** WAP および非 WAP ユーザーのためのネットワーク・アクセス・ユーザー認証、およびデータの暗号化を提供します。IP および WAP トランスポート層セキュリティをサポートし、第三者の RADIUS サーバーを使用するための構成にすることができます。
- **Everyplace Authentication Server:** Everyplace Suite に対して定義されているユーザーが Everyplace Suite サービスへのアクセスを試みた場合に認証を行います。

## 加入者およびデバイスの管理

- **Tivoli Personalized Services Manager:** 加入者および加入者のデバイスを集中的に管理するツールを提供し、離散的なユーザーのグループを作成することができます。

## コンテンツ処理

- **WebSphere Transcoding Publisher:** あて先デバイスまたはネットワークに基づいて、データの加工、フォーマット変換、およびフィルター掛けを行います。
- **WebSphere Edge Server Caching Proxy (Web Traffic Express):** 複数のブラウザ・クライアントに対応するインターネット・データの検索を行い、キャッシング・サーバーおよびコンテンツ・フィルターの役割をします。

## 最適化

- **WebSphere Edge Server Load Balancer (Network Dispatcher):** リアルタイムで Everyplace Suite サーバー間の要求の平衡を取り、大量にアクセスされる企業の容量とスケーラビリティを増加します。

**注:** ユーザーが必要とするサービスを最も良い形で提供または拡張するコンポーネントだけをインストールする必要があります。Everyplace Suite コンポーネントおよびこれらのサブコンポーネントについての詳細は、7ページの『Everyplace Suite コンポーネントの理解』を参照してください。

図1 は、パーベイスブ・デバイス上のクライアント・ソフトウェアとインターネット・アプリケーションおよびコンテンツ間の接続性を提供する Everyplace Suite を示しています。

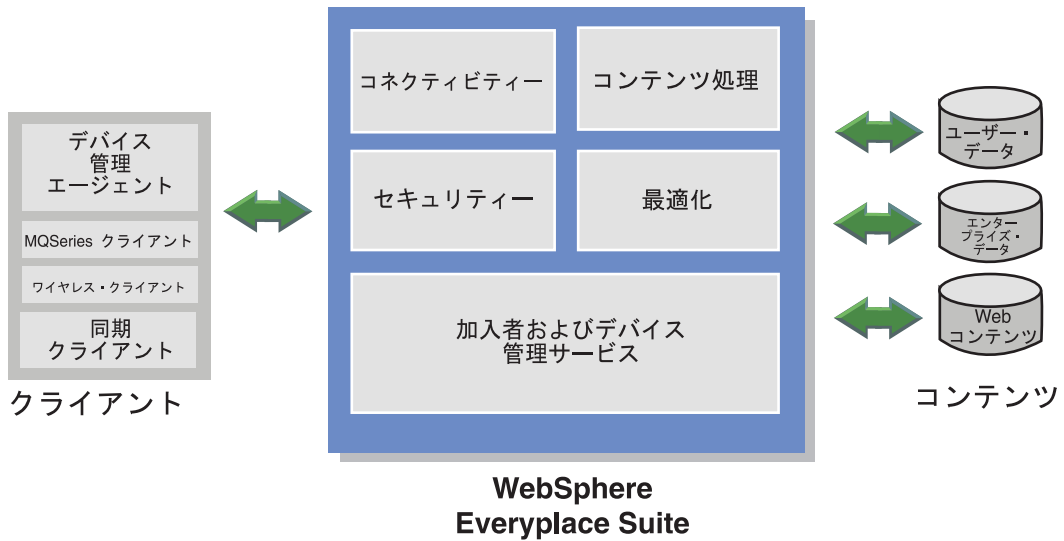


図1. クライアント・デバイスとインターネット・データを接続中の WebSphere Everyplace Suite

## Everyplace Suite 展開例

インストールする Everyplace Suite コンポーネントは、提供する特定のサービスによって異なります。次の例は、3つの顧客要件と、それらに適合する Everyplace Suite ソリューションを表しています。これらは、可能な Everyplace Suite ソリューションのうちのほんの一例です。Everyplace Suite の各展開は、特定のユーザー要件に対する固有のソリューションであることを意図しています。Everyplace Suite 展開についての詳細は、15ページの『Everyplace Suite のインストール・モデル』を参照してください。

## コンテンツ・プロバイダー -- スタートアップ・ポータル会社

あるスタートアップ・ポータル会社が、デバイス・サポート用の完全なソリューションを希望しています。この会社は、既存のユーザー・データベースを持っていません。この会社は、ユーザーが自分の好みと必要に応じてカスタマイズできるインターネット・ポータル・ページを介してコンテンツを提供します。この会社は、また、ワイヤードおよびワイヤレスの両方のデバイスに対応する電子メールや検索エンジン機能などのサービスの提供を希望しています。この会社は、トランスコーディング、デバイス管理、データの同期、および確実なメッセージ交換を含む完全なサービスを要求しています。この会社は、また、統合されたネットワーク・アクセス・サポート (NAS) およびワイヤレス・アクセス・プロトコル (WAP)・コネクティビティーも必要としています。

この会社は、以下の Everyplace Suite コンポーネントを必要としています。

- WebSphere Transcoding Publisher -- データ・トランスコーディング
- MQSeries Everyplace -- 確実なメッセージ交換
- Everyplace Wireless Gateway -- ワイヤレス・デバイス・コネクティビティー (WAP サポート)
- Edge Server Caching Proxy -- パフォーマンスの最適化
- Edge Server Load Balancer -- パフォーマンスの最適化
- Everyplace Authentication Server -- ユーザー認証およびセキュリティ
- Everyplace Synchronization Manager -- データの同期
- Tivoli Personalized Services Manager -- 加入者およびデバイスの管理
- IBM DB2 ユニバーサル・データベース -- 加入者およびデバイスの管理

## 企業の顧客 -- 運送会社

ある夜間デリバリーの会社が、配達中に荷物配達の記録および追跡するためのワイヤレス・デバイスを配達員に携帯させたいと思っています。この会社は、すでに、ユーザーおよび加入者管理を含む、デバイスおよびユーザー・サポートの基本的設備を持っています。ネットワーク・アクセスの基本設備をその残りのデバイスの基本設備と共に組み込むことは、重要ではありません。

この会社は、以下の Everyplace Suite コンポーネントを必要としています。

- Everyplace Wireless Gateway -- ワイヤレス・デバイス・コネクティビティー
- MQSeries Everyplace -- 保証付きメッセージ
- Everyplace Synchronization Manager -- データの同期

## インターネット・サービス・プロバイダー -- パーベイスブ・サポート

ある新しいインターネット・サービス・プロバイダーが、パーベイスブ・デバイス・サービスを専門的に扱いたいと思っています。このプロバイダーは、新しいサービスを取得するために、ユーザーの加入を必要とします。

この会社は、以下の Everyplace Suite コンポーネントを必要としています。

- Everyplace Wireless Gateway -- ワイヤレス・デバイス・コネクティビティー
- Everyplace Authentication Server -- ユーザー認証およびセキュリティ
- Tivoli Personalized Services Manager -- 加入者およびデバイスの管理
- WebSphere Transcoding Publisher -- データ・トランスコーディング
- Edge Server Load Balancer -- パフォーマンスの最適化

Everyplace Suite コンポーネントおよび計画についての詳細は、7ページの『第2章 Everyplace Suite のインプリメント計画』を参照してください。



---

## コンポーネントの資料の検索

本書は、多種類の Everyplace Suite コンポーネントの構成および使用に関する特定の情報を提供していません。Everyplace Suite 内の各コンポーネントが、そのコンポーネントの管理および使用について、独自の資料を提供しています。特定のコンポーネントについての詳細情報が必要な場合は、75ページの『Everyplace Suite コンポーネントの資料の検索方法』にリストされている対応する資料を参照してください。



---

## 第2章 Everyplace Suite のインプリメント計画

本章では、Everyplace Suite のインストール計画に必要な情報を説明しています。すべてのハードウェアおよびソフトウェア要件、およびインストールする前に考慮すべき計画上の問題について説明します。

---

### Everyplace Suite コンポーネントの理解

Everyplace Suite は、Everyplace Suite ドメインにインストールされる数多くのメイン・コンポーネントによって構成されます。また、対応するサブコンポーネントがあるものもあります。Everyplace Suite ドメインは、中央管理制御下にあるサーバー、および同じ記憶保護域 (同じドメイン・ネーム内にある記憶保護域) にあるサーバーのグループ (実行中の Everyplace Suite コンポーネント) により構成されます。このほかにも、インストールする必要がある可能性のあるサポート・コンポーネント (IBM HTTP Server および SecureWay Directory など) があります。これらのサポート・コンポーネントは、一部の Everyplace Suite コンポーネントが必要とするもので、1 次 Everyplace Suite サービスに基本サポートを提供します。

すべてのコンポーネントおよびサポート・コンポーネントのほとんどは、Everyplace Suite 製品 CD に用意されています。他のものについては別個にダウンロードし、Everyplace Suite をインストールする前にインストールする必要があります。

これらのコンポーネントの機能およびこれらをどのように相関させるかについて、インストールの前に理解しておくことが重要です。コンポーネントおよびそのサブコンポーネントは、以下のとおりです。

### Everyplace Suite メイン・コンポーネント

#### Everyplace Authentication Server

Authentication Server は、Everyplace Suite のユーザー認証の入り口 (中央ポイント) です。Everyplace Suite に定義されたユーザーが Everyplace Suite サービスにアクセスしようとした際に、(RADIUS サーバーを通じて) 認証を行います。大部分の Everyplace Suite コンポーネントの統合には、Everyplace Suite ドメインに最低 1 つの Authentication Server が必要です。これは、Everyplace Wireless Gateway を通じて接続するのではないデバイスにとっての Everyplace Suite ドメインへの入り口であり、Everyplace Wireless Gateway を通じて接続するデバイスにとっての次の非ファイアウォール・ホップです。

Authentication Server は、Edge Server Caching Proxy のプラグインとして実行されます。Caching Proxy は、Authentication Server の前提条件であり、Authentication Server と同じマシン上にインストールしなければなりません。Authentication Server は、以下の 2 つのうちのいずれかのモードで構成できません。

- **認証プロキシ:** HTTP 認証ヘッダーに基づいてユーザー認証を実行します。認証プロキシがインストールされている Everyplace Suite ドメインでは、Everyplace Suite ドメインの他の起点サーバー (コンテンツまたはアプリケーション・サーバー) が独自にユーザー認証を行うことはできません。認証プロキシによって認証されたユーザーは、Everyplace Suite ドメインの外側のコンテンツにはアクセスできません。
- **透過認証プロキシ:** HTTP プロキシ認証ヘッダーに基づいてユーザー認証を実行します。透過プロキシがインストールされている Everyplace Suite ドメインでは、Everyplace Suite ドメインの起点サーバー (コンテンツまたはアプリケーション・サーバー) が独自にユーザー認証を行うことができます。透過認証プロキシでは、ユーザーは Everyplace Suite ドメインの外側のコンテンツにアクセスできます。

**注:** Authentication Server では、Everyplace Suite ドメインのすべてのサービスに対して単一のユーザー・サインオン (ユーザー ID およびパスワード) が可能です。このフィーチャーでは、ユーザー ID およびパスワードを必要とするサービスにアクセスするために、ユーザー認証を 1 度行うだけで済みます。Everyplace Suite ドメインの外側のサービスでは、認証が必要です。

たとえば、Everyplace Suite を使用し、そのユーザー ID およびパスワードを入力するエンタープライズ・サイトへのユーザー・ログオンは、Authentication Server によって認証されます。ユーザーがそのパスワードを変更する場合 (Tivoli Personalized Services Manager によって実行される)、このサービスにアクセスするために再度ユーザー ID およびパスワードを入力する必要はありません。

## Everyplace Wireless Gateway

このコンポーネントは、ワイヤレス環境およびワイヤード環境でインターネット・プロトコル (IP) およびワイヤレス・アプリケーション・プロトコル (WAP) アプリケーションを使用できるようにする通信プラットフォームを提供します。Wireless Gateway は、無線およびダイヤルアップ・ネットワークを通じてホストおよびネットワーク・リソースにアクセスする Wireless Client を含むモバイル・デバイスを提供します。これは、ワイヤレス・リンクを移動するデータを暗号化、圧縮、および最小化することができ、それによってメッセージ交換の速度が増します。Wireless Gateway には、以下のサブコンポーネントが含まれます。

- **ゲートウェイ:** Everyplace Wireless Gateway は、インターネット・プロトコル (IP) およびワイヤレス・アプリケーション・プロトコル (WAP) アプリケーションをワイヤレス環境とワイヤード環境の両方で実行することを可能にします。無線、ダイヤル呼び出し、有線ネットワーク経由での、ホストおよびネットワーク・リソースへのワイヤレス・アクセスを提供します。

- **ゲートキーパー:** ゲートキーパーは Everyplace Wireless Gateway およびワイヤレス・リソースの Java ベース管理ツールです。管理者がこれを使用して、ワイヤレスおよびワイヤレス・アプリケーション・プロトコル (WAP) ゲートウェイの構成、ユーザーおよびモバイル機器の追加などのタスクを実行することができます。
- **Ardis サポート:** Advanced Radio Data Information Services プロトコルが使用可能になります。Motient がネットワーク・プロバイダーです。
- **Dataradio サポート:** Dataradio ネットワーク・プロバイダーが使用可能になります。
- **DataTAC サポート:** DataTAC 5000 ネットワークおよび DataTAC 6000 ネットワークが使用可能になります。
- **Dial サポート:** Global System for Mobile Communication (GSM)、Advanced Mobile Phone Service (AMPS)、公衆交換電話回線網 (PSTN)、およびサービス総合デジタル網 (ISDN) ネットワークなどのダイヤル可能デジタル・ネットワークおよびアナログ・ネットワークが使用可能になります。これらのネットワークでは、固有の Point-to-Point Protocol (PPP) もサポートされます。
- **IP LAN サポート:** 特に、セルラー・デジタル・パケット・データ (CDPD)、および汎用パケット無線サービス (GPRS) などの LAN ベース・ネットワーク・プロバイダーおよびすべての IP ベース・モバイル・デバイスが使用可能になります。IP LAN サポートは、ワイヤード環境およびネットワーク上の任意の 2 つのノードに対して動作します。2 つのネットワーク・ノードを使用して、ノード間で VPN (仮想プライベート・ネットワーク) として働くセキュア・トンネルを作成することができます。
- **Mobitex サポート:** Mobitex プロトコルを含むネットワークが使用可能になります。これらのネットワークには、BellSouth Wireless、CanTel、および Norcom Satellite などがあります。
- **Modacom-SCR サポート:** Modacom ネットワーク・プロバイダーが使用可能になります。このサブコンポーネントは、現在 AIX システムでのみ使用可能です。
- **Motorola PMR:** Motorola Private Mobile Radio (PMR) ネットワークで、1 つまたは複数の RNC-3000 ネットワーク・コントローラーを使用した通信が可能になります。
- **Wireless Client:** Wireless Gateway を使用した通信を開始および停止するためのインターフェースです。Wireless Client は、インターフェース層の内側のネットワーク固有の詳細を保護し、モバイル・コンピューター上で、ワイヤレス・ネットワークを介して IP アプリケーションを実行できるようにします。たとえば、モバイル・デバイスで使用するために、無線ネットワークに特殊な通信プロトコルは必要ありません。

注: Wireless Client は Everyplace Suite サーバーではなくクライアント・デバイスにインストールされます。

### **MQSeries Everyplace for Multiplatforms**

MQSeries Everyplace は、デバイスと MQSeries ファミリー・プラットフォームの間の確かなメッセージ交換機能を提供します。これは、セキュア・メッセージ交換を拡張し、モバイル業者による信頼性のある通信を実現します。ラップトップ、サーバー、PDA、電話、およびセンサー、MQSeries ネットワークなどの無人デバイスに接続します。これにより、ユーザーは、電子メール・アクセス、株式の購入、発注などの業務機能を自分のモバイル・デバイスから実行できるようになります。MQSeries Everyplace は Java および C のコンポーネントから構成され、ソリューション・デベロッパーはさまざまなデバイスおよびプラットフォーム上に MQSeries Everyplace のゲートウェイおよびクライアントを作成できるようになります。

MQSeries Everyplace 固有の C クライアント・バージョンは Everyplace Suite にインストールされません。以下の場所からダウンロードできます。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/>

### **WebSphere Edge Server Caching Proxy (Web Traffic Express)**

Caching Proxy は、複数のブラウザー・クライアントのインターネット・データを検索します。また、キャッシング・サーバーおよびコンテンツ・フィルターとしても働いて、インターネットからの情報の検索に必要な時間を短縮したり、複数のブラウザー・クライアントのインターネット・データをフィルター処理したりします。

### **WebSphere Edge Server Load Balancer (Network Dispatcher)**

Load Balancer は、サーバーの動的ロード・バランシング、スケーラビリティ、および高可用性を提供し、各着信要求を処理するサーバー・グループの中で最適のサーバーを自動的に見つけることによって、サーバー全体のパフォーマンスを向上させます。これは、Web サーバー、電子メール・サーバー、分散並列データベース照会、およびその他の伝送制御プロトコル (TCP) または User Datagram Protocol (UDP) アプリケーションで使用することができます。Load Balancer には、以下のサブコンポーネントが含まれます。

- **コンテンツ・ベース・ルーティング:** 以下のいずれかの方法で平衡化を実行します。
  - HTTP の場合、コンテンツ・ベース・ルーティングは HTTP クライアント要求のコンテンツに基づいて平衡化を実行します。この方法では、同じマシン上に Caching Proxy が必要です。
  - IMAP および POP3 の場合、コンテンツ・ベース・ルーティングは IMAP または POP3 メール・サーバーの平衡化を実行します。クライアントの提供するユーザー ID およびパスワードに基づいて適切なサーバーを選択するため、Caching Proxy は必要ありません。

- **ディスパッチャー:** IP パケット・レベルのロード・バランサーです。動的に設定される重みおよび測定値を使用して、ハイパフォーマンスで待ち時間の少ないロード・バランシングを提供します。  
HTTP、FTP、SSL、NNTP、IMAP、POP3、SMTP、および Telnet などのプロトコル用の組み込みサポートも提供しますが、TCP および UDP をサポートするようにも拡張可能です。
- **対話式セッション・サポート:** ドメイン・ネーム・サーバーを使用してサーバーのロード・バランシングを行います。これは、負荷をモニターするサーバー・エージェントと通信して、この負荷に基づいてクライアントへ戻す IP アドレスを更新することによって行われます。対話式セッション・サポートは、この同じサーバー負荷情報をディスパッチャー・サブコンポーネントへ提供することもできます。

### Tivoli Personalized Services Manager

このコンポーネントを使用すると、サービス・プロバイダーは、加入者およびデバイスを中央で管理できるようになります。管理作業には、加入者およびデバイスの登録、セルフ・ケアおよびカスタマー・ケアの提供、加入者のアカウントの保守および課金、またとりわけ、デバイスへのソフトウェア配布などのジョブの実行依頼などが含まれます。Tivoli Personalized Services Manager には、以下のサブコンポーネントが含まれます。

- **Tivoli デバイス・マネージャー・フィーチャー:** サービス・プロバイダーが加入者に普及しつつあるデバイス (PDA、サブノートおよびその他のデバイスなど) を管理するための補助を行います。デバイス・マネージャーは、デバイス・マネージャーおよびサービス・プロバイダーがサポートするデバイスに対して、ソフトウェアの確認、構成、および配布を行うことができます。
- **Enrollment Server:** 固有のバナー、メッセージ、課金計画、および支払いオプションを持つカスタマイズ可能な一連の画面を含む、ISP 用の加入者およびデバイスの登録エンジンを提供します。登録サーバーは、その ISP とは無関係に、すべての加入者に Tivoli Personalized Services Manager フィーチャーを配布します。
- **Database Integration:** インストール・プログラムまたはユーザーが DB2 または Oracle database を作成できるようになります。Tivoli Personalized Services Manager をインストールする場合、このサブコンポーネントをインストールしなければなりません。
- **Customer Care Support:** 担当者が、新規アカウントまたは子アカウントをオープンしたり、アカウントを活動開始または活動停止したりできるようになります。また、担当者が個人情報、サービス計画、支払い方法、および電子メール設定を表示および更新できるようにもなります。
- **Member Self Care Support:** 加入者が自分のモバイル・デバイスでポータル・ページを変更したり、住所および電話データ、課金計画、支払い方法、

および Tivoli Personalized Services Manager のプレミアム・コンテンツの登録など、プロフィール・データの一部を変更したりできるようになります。

- **Active Session Table:** ユーザーおよびセッションの情報を保持します。
- **RADIUS:** リモート認証ダイヤルイン・ユーザー・サービス (Remote Authentication Dial-In User Service) です。RADIUS 認証プロトコルに従ったユーザー認証を提供します。ユーザーおよびアカウントが有効であれば、セッションの開始が許可されます。
- **システム管理:** 加入者、ドメイン、およびメンバーシップの計画および取り扱いなどの各グループをセットアップするための機能を提供します。また、ユーザーは加入者プロフィールにアクセスできるようになります。
- **Everyplace Suite イネーブラー:** Tivoli Personalized Services Manager が SecureWay Directory 内のその加入者データベースを管理できるようにします。
- **ポータル・ツールキット:** ポータル・ツールキット・サブコンポーネントを使用すると、背景色、リンクなど、ユーザーのホームページを個別設定することができます。

### WebSphere Transcoding Publisher

Transcoding Publisher は、あて先デバイスの特性およびネットワークのサービス・レベルに Web コンテンツを適合させます。変換済みのデータを保管する Edge Server Caching Proxy もインストールすれば、Transcoding Publisher のパフォーマンスを向上させることができます。これにより、Web ページを検索するごとに再変換する必要がなくなります。

**注:** WebSphere Transcoding Publisher は、Everyplace Suite ドメインのプロキシヤーとして配置することを目的として作成されています。Everyplace Suite ドメインのサーブレットまたは JavaBean として使用することは意図されていません。

### Everyplace Synchronization Manager

Everyplace Synchronization Manager は、携帯用計算装置をリモートでデスクトップ・アプリケーションにリンクできるようにします。モバイル・ユーザーは、Microsoft Exchange、Lotus Notes または DB2 データベースに容易にデータを同期化することができます (将来は、Oracle や Sybase などの ODBC 準拠のデータベースが使用可能になります)。モバイル装置は、モデム、携帯電話、インターネット、ワイヤレス、イントラネット、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) または広域ネットワーク (WAN) を使用して同期化することができます。モバイル・ユーザーは、既存の Microsoft Exchange や Lotus Notes ユーザー・データ、または Everyplace Synchronization Manager 内部で保持されているユーザーのリストを介して認証されます。データは、安全な伝送のために暗号化することができます。モバイル装置は、自動的にバックアップまたは復元することができ、アプリケーションは、リモートでこれらの装置に



インストールすることができます。Everyplace Synchronization Manager には、以下のサブコンポーネントが含まれます。

- **Everyplace Synchronization Manager Service:** モバイル装置からの要求を処理して、セキュリティーを管理し、モバイル・データ・ソースと企業データ・ソース間のすべてのデータ転送を実行します。Unix サーバー上で実行されます。
- **Everyplace Synchronization Manager Admin:** 管理者が Synchronization Manager サービスによって実行される同期をセットアップまたは変更できるようにします。ウィザードまたは直観的形式を使用します。Unix サーバー上で実行されます。
- **Exchange Connector:** Synchronization Manager が Microsoft Exchange Server を同期化できるようにします。Windows NT4 または 2000 上で実行されます。
- **Notes Connector:** Synchronization Manager が Lotus Notes に同期化できるようにします。Unix サーバー上で実行されます。
- **Everyplace Synchronization Proxy:** モバイル装置は、直接 (ダイヤルアップまたはパケット・ネットワークによる) Synchronization Manager Service に同期化するか、間接的にデスクトップ PC へのシリアル・ケーブルに同期化する場合があり、その後 Synchronization Manager Service に接続します。Everyplace Synchronization Proxy は、ケーブルを介して同期化するために、デスクトップ PC にインストールし、そこで実行される必要があります。Windows 上で実行されます。
- **Everyplace Synchronization Client:** モバイル装置が Synchronization Manager Service を介して企業データ・ソースに同期化できるようにします。クライアントは、Windows インストール・ライブラリーと一緒にパックされています。

**注:** Everyplace Synchronization Manager は、Everyplace Suite インストール・プログラムではインストールされません。Everyplace Suite 製品 CD の CD 番号 11 から、単独でインストールされます。インストールの説明については、CD 11 の /esm/docs ディレクトリーにある資料を参照してください。

### Everyplace Administration Console

Administration Console は、インストールされている Everyplace Suite コンポーネントの対応する管理コンソールを立ち上げるための中央設置場所を提供します。

## サポート・コンポーネント

以下のコンポーネントは、製品 CD に含まれており、Everyplace Suite のサポート・コンポーネントとして必要になります。

## SecureWay Directory

独立型デーモンとして実行される Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) ディレクトリーです。LDAP サーバーへのクライアント・アクセスを提供するクライアント / サーバー・モデルに基づいています。SecureWay Directory は、保管、更新、検索、および交換のための中央設置場所のディレクトリー情報を容易に保守する方法を提供します。

## IBM HTTP Server

Apache Web サーバーを基にした IBM の拡張 Web サーバーです。IBM HTTP Server は、セキュア・コネクションのための SSL (Secure Sockets Layer) バージョン 2 および SSL バージョン 3 の両方のプロトコルをサポートします。また、静的 Web ページをサービスする際のパフォーマンスを改善するためのキャッシュ・アクセラレーターも組み込まれています。

## IBM DB2 ユニバーサル・データベース エンタープライズ版

DB2 は、さまざまなレベルの複雑さを持つデータベース環境をサポートする、Web 対応リレーショナル・データベース管理システムです。

## WebSphere Application Server スタンダード版

e-business アプリケーション用の堅固な展開環境による Web トランザクションおよび対話が可能になります。サーブレット、JavaBean、JSP (JavaServer Pages) ファイル、およびエンタープライズ bean のサポートおよび実行に焦点を当てた、移植可能な Java ベースの Web アプリケーション・デプロイメント・プラットフォームを提供します。

## Java 開発キット (AIX のみ)

Java プログラム言語を使用して作成されたアプレットおよびアプリケーションをコンパイル、デバッグ、および実行するために使用するソフトウェアおよびツールが含まれています。

以下のサポート・コンポーネントは必須ですが、製品 CD には含まれていません。ダウンロードおよびインストールの説明については、該当の Web サイトを参照してください。

## Java 開発キット (Solaris)

Java プログラム言語を使用して作成されたアプレットおよびアプリケーションをコンパイル、デバッグ、および実行するために使用するソフトウェアおよびツールが含まれています。ダウンロードおよびインストールの説明については、Web サイト <http://www.sun.com/software/solaris/java/archive.html> を参照してください。

## Netscape Communicator -- Netscape Navigator

インターネットの Web ページおよびその他の HTML ベース文書を表示します。ダウンロードおよびインストールの説明については、Web サイト <http://www.netscape.com/computing/download/index.html> を参照してください。

## Everyplace Suite のインストール・モデル

Everyplace Suite コンポーネントのインストールは、各 Everyplace Suite ドメインごとに異なります。Everyplace Suite ドメインは、中央管理制御下にある企業のサーバー、および同じ記憶保護域にある企業のサーバーのグループにより構成されます。通常、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 内には、1 つ以上の Everyplace Suite コンポーネントがインストールされている多数のサーバーが存在します。たとえば、WebSphere Transcoding Publisher を実行する 4 つのサーバーがあるクラスターと Everyplace Wireless Gateway を実行する 8 つのサーバーがあるクラスターを置くことができます。

Everyplace Suite コンポーネントを実行するには、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) インプリメンテーションが必要です。Everyplace Suite コンポーネントは、SecureWay Directory を共通の情報プラットフォームとして使用して、Everyplace Suite ドメイン内でのシームレス (継ぎ目がない) な統合を維持します。Everyplace Suite は、SecureWay Directory バージョン 3.2 でのみインプリメントされる特定のディレクトリー・スキーマに依存しています。したがって、SecureWay Directory はすべての Everyplace Suite コンポーネントの前提条件ということになります。すべての Everyplace Suite ドメイン内に SecureWay Directory を配置することを強くお勧めします。

**注:** SecureWay Directory 以外の LDAP インプリメンテーションを使用して Everyplace Suite をインストールまたは使用する場合、あらかじめ IBM の技術担当者に相談するようにしてください。

ネットワークの計画および設計に関する問題についての詳細は、WebSphere Everyplace Suite Redbooks を参照してください。これらはオンライン上の以下の場所にあります。

<http://www.redbooks.ibm.com/pubs/pdfs/redbooks/sg245995.pdf> および  
<http://www.redbooks.ibm.com/pubs/pdfs/redbooks/sg245996.pdf>

これらの IBM Redbooks およびその他の Redbooks のハードコピーの入手についての詳細は、<http://www.redbooks.ibm.com> を参照してください。

図2 および 図3 は、Everyplace Suite の 2 つのインプリメンテーション例を示したものです。これらの図は説明のためのものです。これらの例に正確に一致する Everyplace Suite インストールがあるわけではありません。以下の図において、各サーバー・クラスターは 1 つのボックスでのみ表されていますが、サーバー・クラスターには、特定のサービスを実行する 1 つ以上のサーバーを含めることができます。Edge Server Load Balancer を配置して、同じサービス (たとえば、認証や変換) を実行するすべてのサーバー・クラスターにトラフィックを分散させることができます。すべてのサーバー・クラスターについて、対応する Load Balancer があることとしますが、以下の図では示しません。

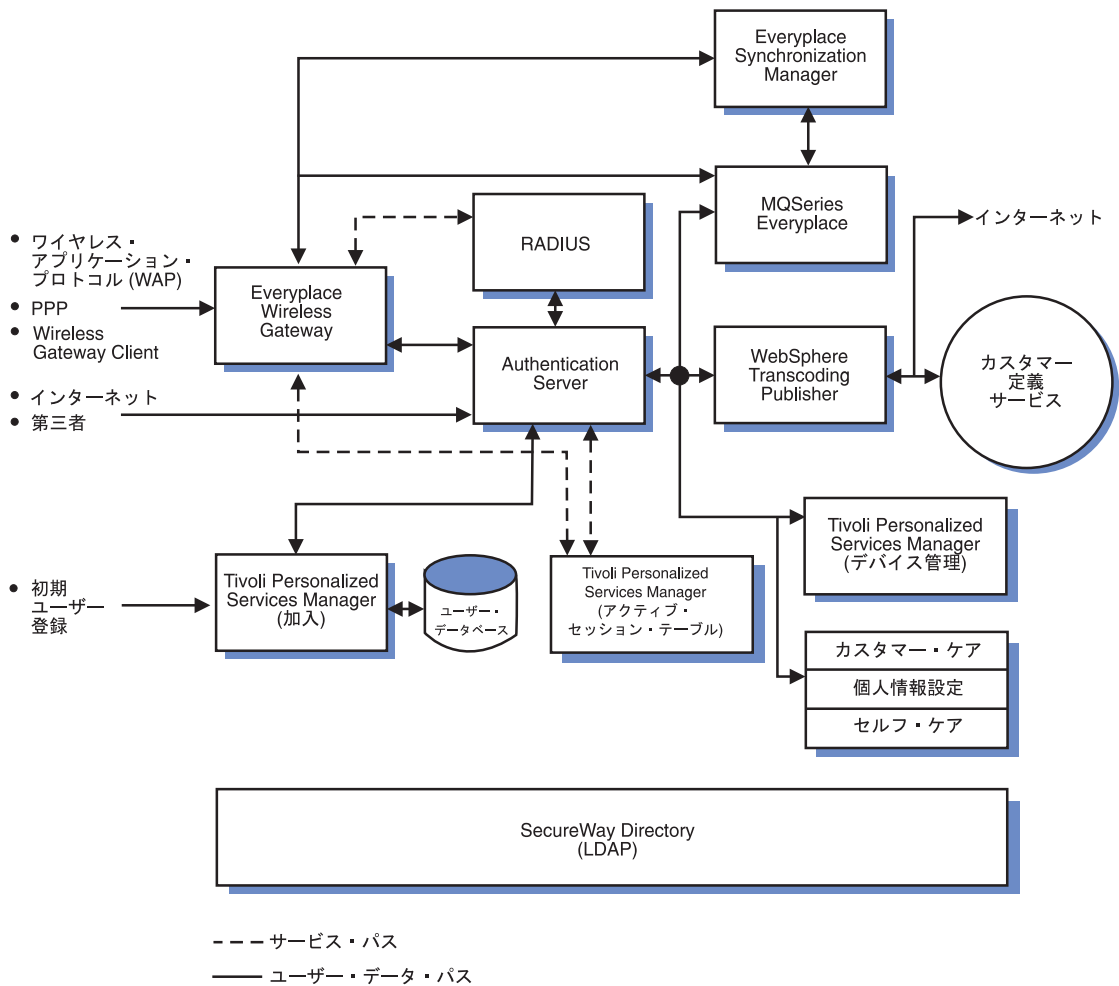


図2. 完全な Everyplace Suite のインストール

## 完全な Everyplace Suite のインストール

図2 は、すべてのキー・コンポーネントが配置された Everyplace Suite ドメインを表しています。この配置は、従来のワイヤード・インターネット・サービスのほかに、普及過程のデバイス・サポートのための完全なソリューションを探している企業に一般的なものです。この種の企業についての説明は、3ページの『コンテンツ・プロバイダー -- スタートアップ・ポータル会社』を参照してください。この Everyplace Suite ドメインにおける通信の流れの 1 例として、以下のものがあります。

- ユーザーが携帯電話を使用して個人の電子メールにアクセスを試みる。

- 接続の確立後、Wireless Gateway が要求を受信する。
- Edge Server Load Balancer が要求を適切な Authentication Server にディスパッチする。
- Authentication Server が認証を実行して、ユーザー・アクセスを許可する。
- Edge Server Load Balancer が要求を適切な WebSphere Transcoding Publisher サーバーにディスパッチする。
- Transcoding Publisher が、バック・エンド・カスタマー定義のサービス (おそらく WebSphere Application Server) を処理するサーバーに要求を転送する。
- Application Server が要求された電子メール・データを Transcoding Publisher に戻す。
- Transcoding Publisher が携帯電話の表示仕様に従って電子メール・データを再フォーマットして、Wireless Gateway に戻す。
- Wireless Gateway が再フォーマットされた電子メール・データを携帯電話ユーザーに転送する。

Everyplace Suite コンポーネントは、SecureWay Directory を共通の情報プラットフォームとして使用して、Everyplace Suite ドメイン内でのシームレス (継ぎ目がない) な統合を維持します。

### Wireless Gateway を使用した限定 Everyplace Suite インストール

図3 は、Wireless Gateway を中心とした Everyplace Suite の限定インストールを表しています。この種のインストールは、既にデバイスおよびユーザー・サポート (加入者管理など) を備えている企業に一般的なものです。この種の企業についての説明は、4ページの『企業の顧客 -- 運送会社』を参照してください。

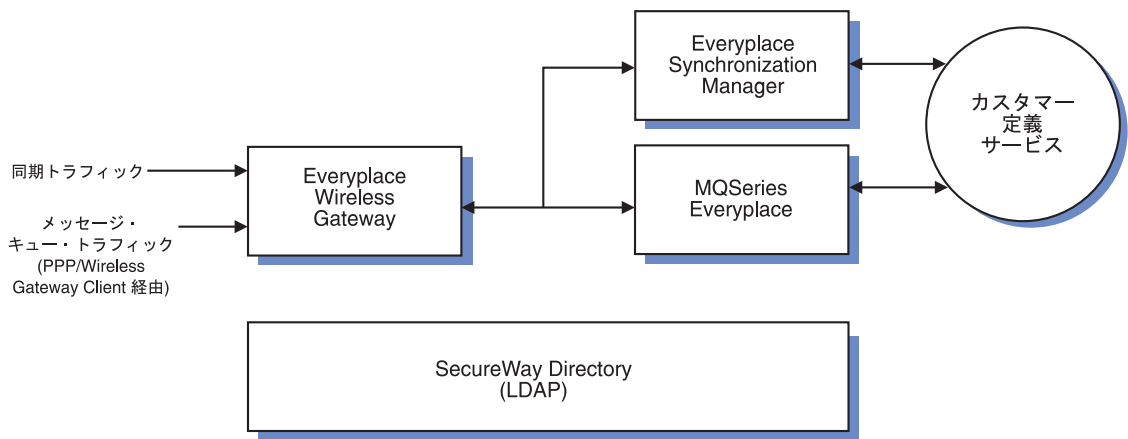


図3. Wireless Gateway を使用した限定 Everyplace Suite インストール

---

## インストール前の計画

Everyplace Suite をインストールする前に、本節をよくお読みください。本節では、SecureWay Directory のインストールと構成、および Authentication Server の構成についての情報を記載しています。

## SecureWay Directory のインストール計画

Everyplace Suite は、SecureWay Directory を使用して共有ディレクトリー構造にある管理情報にアクセスし、管理します。SecureWay Directory は Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) バージョン 3 をサポートしています。このプロトコルは、TCP または SSL 接続を介した X.500 ディレクトリーへのアクセスを提供します。LDAP は、データベースのようにディレクトリー・サービスに情報を保管し、照会を行います。LDAP 使用可能アプリケーションが、ユーザー認証情報などの情報を保管すると、LDAP サーバーを使用するその他のアプリケーションがそれを認識します。

インストールの際、Everyplace Suite ドメインでインストール情報および構成情報を保管および共用するための 3 つのオプションが与えられます。

1. このサーバーに **SecureWay Directory** をインストールする: このオプションは、ローカル・サーバーに SecureWay Directory をインストールします。
2. **SecureWay Directory** サーバーから **Everyplace Suite** 情報を検索する: このオプションは、Everyplace Suite ドメイン内の既存の SecureWay Directory (LDAP) サーバーから情報を検索するようにインストール・プログラムに指示します。
3. ファイルから既存の **Everyplace Suite** 情報を検索する: このオプションは、SecureWay Directory を使用せずにインストールを実行できるようにします。インストール情報は、後でファイル・システムまたはディスク・メディアから検索します。

選択したオプションによって、以下のような情報を入力するようにプロンプトが出されます。

### • **SecureWay Directory** をインストールする

このオプションは、ローカル・サーバーに SecureWay Directory をインストールします。このオプションを選択すると、以下の情報を入力するようにプロンプトが出されます。

#### – ディレクトリー・サフィックス

ディレクトリー・サフィックスには、ディレクトリーのルート (root) の Distinguished Name (識別名) を指定します。ディレクトリー・サフィックスは、サーバーによってディレクトリーの最上位に保管されている項目に与えられる識別名です。

- **オブジェクト・タイプ**

オブジェクト・タイプには、SecureWay Directory データベース項目の一連の必須属性およびオプション属性を指定します。オブジェクト・タイプは、データベース内での項目の位置も定義します。

- **データベース名**

データベース名には、SecureWay Directory データベースの名前を指定します。

- **データベース・インスタンス**

データベース・インスタンスには、データベースをカタログ化し、SecureWay Directory データベースの構成パラメーターを設定することのできるデータベース・マネージャー環境を指定します。

- **データベース・ホーム・ディレクトリー**

データベースのホーム・ディレクトリーには、SecureWay Directory データベースが位置するディレクトリーのファイル・パスを指定します。

- **ポート番号**

ポート番号には、SecureWay Directory データベースが位置するネットワーク・ポートを指定します。

以下の図は、「このサーバーに **SecureWay Directory** をインストールする」オプションのインストール・プログラムでの画面を示しています。

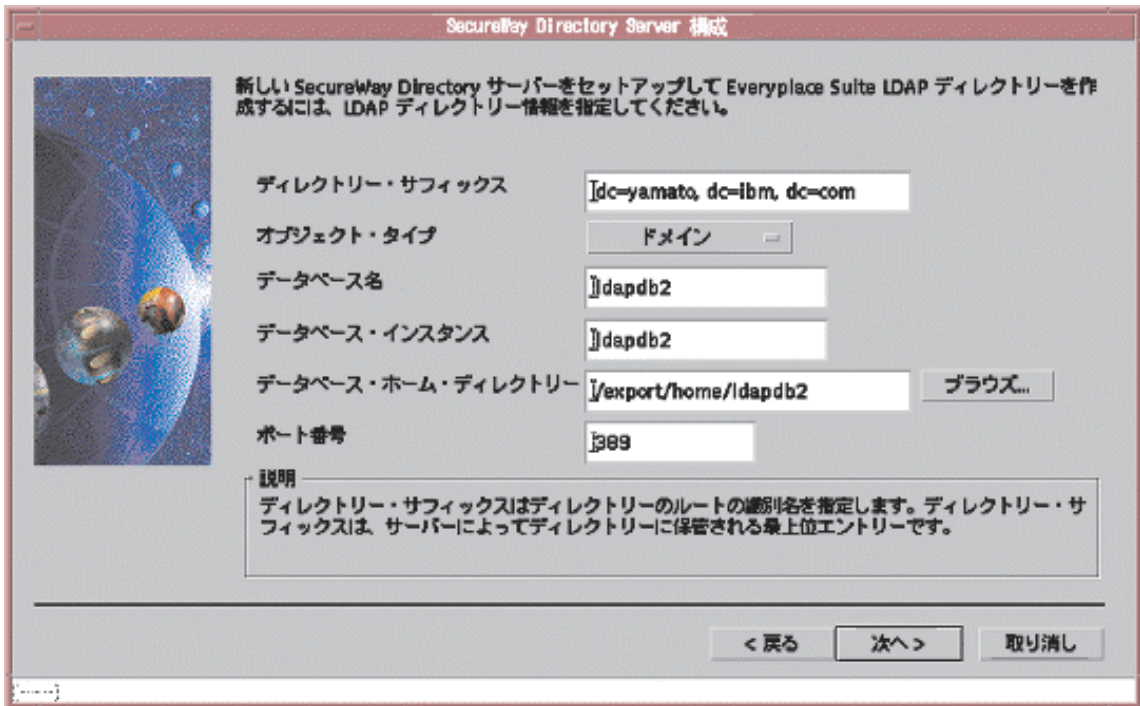


図 4. SecureWay Directory 構成パラメーター・パネル

- **SecureWay Directory サーバーから既存の Everyplace Suite 情報を検索する**

このオプションは、Everyplace Suite ドメイン内の既存の SecureWay Directory (LDAP) サーバーから情報を検索するようにインストール・プログラムに指示します。このオプションを選択すると、既存の SecureWay Directory サーバーに関する以下の情報を入力するようにプロンプトが出されます。

  - サーバー名
  - ユーザー ID
  - パスワード
  - ポート
- **ファイルから既存の Everyplace Suite 情報を検索する**

このオプションは、SecureWay Directory を使用せずにインストールを実行できるようにします。インストール情報は、後でファイル・システムまたはディスク・メディアから検索します。このオプションは、以下の場合に使用してください。

  - 既存の SecureWay Directory ドメインと分離したサーバーでのインストール。
  - SecureWay Directory のインストールより前に行われる Everyplace Suite コンポーネントのインストール。



**注:**

このオプションを選択すると、インストール・ウィザードのコンポーネント選択パネルで SecureWay Directory が表示されます。これで、Everyplace Suite ドメインにある任意のマシンに SecureWay Directory をインストールするオプションが選択できます。

このオプションを選択すると、Everyplace Suite LDAP Data Interchange Format (LDIF) ファイルのファイル名を入力するようにプロンプトが出されます。このファイルは、SecureWay Directory 項目をテキスト形式で保存します。このファイルは、後で SecureWay Directory にインポートされるインストール情報および構成情報の一時ホルダーとして機能します。デフォルトのファイル名およびパスは /tmp/everypalce/everypalce です。デフォルトのファイルを使用するか、希望のファイルの名前およびパスを入力してください。

**注:**

1. Everyplace Suite ドメイン内での今後のインストールでも、同じ LDIF ファイルを使用することを強くお勧めします。
2. LDIF ファイルを使用して Tivoli Personalized Services Manager をインストールしている場合は、Everyplace Suite インストール・プログラムに SecureWay Directory を使用できないため、リモート DB2 データベース・サーバーを使用してインストールすることはできません。したがって、ローカル DB2 データベース・サーバー上で Tivoli Personalized Services Manager をインストールしている場合を除き、このオプションは使用しないでください。

## SecureWay Directory への LDIF ファイルのインポート

SecureWay Directory をインストールする前に Everyplace Suite コンポーネントをインストールした場合（「ファイルから既存の Everyplace Suite 情報を検索する (Retrieve existing Everyplace Suite information from a file)」オプションを使用）、ドメインにインストールして実行した後で、インストール情報および構成情報を SecureWay Directory にインポートしなければなりません。このインポートは、SecureWay Directory のインストール時に、インストール・ウィザードによって自動的に行われます。

このインポートを手動で行う必要がある場合、ldif2db ユーティリティを使用してください。SecureWay Directory サーバーで以下のコマンドを実行する必要があります。

```
ldif2db -i file_name
```

file\_name は、インストール時に指定した LDIF ファイルの絶対パスです。

## SecureWay Directory をリフレッシュするための Everyplace Suite Directory のバックアップ

SecureWay Directory をリフレッシュし、インストール時に作成された既存の Everyplace Suite LDAP Directory をバックアップするには、以下のコマンドを使用して行うことができます。

```
db2ldif -o backup_file_name -s suffix_name
```

backup\_file\_name は作成されるバックアップ・ファイルの名前、suffix\_name はディレクトリー・サフィックス、つまり SecureWay Directory のインストール時に指定した Distinguished Name (識別名) です。これでディレクトリー情報が LDIF ファイルに保管されます。

SecureWay Directory がリフレッシュされた後、21ページの『SecureWay Directory への LDIF ファイルのインポート』で説明されているとおりに、LDIF ファイルから SecureWay Directory に情報をインポートし直すようにしてください。

## Authentication Server の構成パラメーター

Authentication Server をインストールする場合、インストール・ウィザードによって構成情報を入力するようプロンプトが出されます。この情報の一部は、Everyplace Suite ドメインにある Authentication Server のすべてのインスタンスに共通のもので、その他の情報は、Authentication Server の各インスタンスに固有のもので、インストール後、これらの構成パラメーターは共通から固有へ、または固有から共通へと再割り当てすることができます。これらの Authentication Server 構成項目についての説明は、64ページの表6を参照してください。

以下の共通情報を指定する必要があります。

- 1 次 Active Session Table (AST) サーバー名
- 2 次 Active Session Table (AST) サーバー名
- 最大 RADIUS 再試行回数
- RADIUS 共用シークレット
- 最大 RADIUS 再試行タイムアウト (ミリ秒)
- 最大セッション経過時間 (分)
- デフォルト再試行遅延 (秒)

Authentication Server は、Everyplace Suite 内のリソースに対して行われたすべての要求を代行受信する認証プロキシとして構成するか、または、第三者のコンテンツ・サーバーによって提供されるコンテンツへのアクセスを許可する透過認証プロキシとして構成して、Everyplace Suite の認証および変換を利用するか、いずれかのモードで構成することができます。これは、インストール時に固有の Authentication Server パネルで「**Authentication Server の役割**」を指定することによって行います。

認証プロキシおよび透過認証プロキシの各モードのサンプル構成ファイル (それぞれ `ibmproxy_ap.conf.sample` および `ibmproxy_tp.conf.sample`) は、`src/wes_auth/samples/` にあります。Everyplace Suite に関連するファイル項目は、関連するコメントの 'WES' によって指定されます。

Authentication Server をインストールするそれぞれのサーバーごとに、以下の情報を指定する必要があります。この情報は、各サーバーに固有のものです。

- Authentication Server の役割
- 1 次 RADIUS サーバー名
- 2 次 RADIUS サーバー名
- 最大セッション・キャッシュ・サイズ
- Active Session Table (AST) デモン・クリーンアップ間隔

これらの Authentication Server 構成パラメーターは、インストール後に Directory Management Tool を使用して変更することができます。Authentication Server 構成および Directory Management Tool の使用についての詳細は、59ページの『SecureWay Directory における Authentication Server 情報の構成』を参照してください。

**注:** Authentication Server を構成して、Everyplace Suite 環境に WebSphere Transcoding Publisher を配置する場合、Transcoding Publisher を通してコンテンツをルーティングするとパフォーマンスが低下する場合があります。必要な場合のみ変換を使用するように注意してください。

## Tivoli Personalized Services Manager インストール前の要件

Tivoli Personalized Services Manager をインストールする前に、以下の項目を検討するようにしてください。

- AIX システムに Tivoli Personalized Services Manager をインストールする場合、IBM AIX Developer Kit、Java™2 Technology Edition バージョン 1.2.2 が自動的にインストールされます。Java バージョン 1.2.2 を実行するために必要な AIX PTF ファイルのインストールについての情報は、28ページの『Java バージョン 1.2.2 への AIX PTF の適用』を参照してください。
- Tivoli Personalized Services Manager をインストールする前に、C コンパイラーをインストールする必要があります。

**注:** Tivoli Personalized Services Manager をインストールする前にこのコンパイラーをインストールし、ライセンスを活動開始しておくことは非常に重要です。

## AIX の場合

IBM C compiler for AIX バージョン 5.01 をインストールします。この製品は、Web サイト <http://www2.software.ibm.com/prodindex/prodindex.nsf/H2BPages/DMUR-4CPLLN?opendocument> からダウンロードすることができます。

## Solaris の場合

Sun WorkShop バージョン 5.0 をインストールします。この製品は、Web サイト [http://solutions.sun.com/catalogs/all/Software\\_Engineering/Software\\_Development\\_Tools/33868.html](http://solutions.sun.com/catalogs/all/Software_Engineering/Software_Development_Tools/33868.html) からダウンロードすることができます。

- LDIF ファイルを使用して Tivoli Personalized Services Manager をインストールしている場合 (アクティブな SecureWay Directory なし) は、Everyplace Suite インストール・プログラムに SecureWay Directory を使用できないため、リモート DB2 データベース・サーバーを使用してインストールすることはできません。したがって、ローカル DB2 データベース・サーバー上で Tivoli Personalized Services Manager をインストールしている場合を除き、このオプションは使用しないでください。

## 追加ハード・ディスクでの Tivoli データベース構成のカスタマイズ

Tivoli Personalized Services Manager のインストール時に、インストール・プログラムによって以下の質問が出されます。

### Tivoli Personalized Services Manager のデータベース構成パラメーターを変更しますか?

これによって、Everyplace Suite インストール・プログラムが使用するデフォルト設定を変更することができます。Tivoli Personalized Services Manager データおよびインデックス・データに追加のハード・ディスクを使用する場合、上記の質問に「はい」と答える前に以下のファイルを編集する必要があります。

```
/usr/TivTSM/db/db2/install/creispblv.ksh
```

Oracle Database を使用している場合の正しいファイル名は、  
`/usr/TivTSM/db/oracle/install/creispblv.ksh` です。

たとえば、`hdisk3` と `hdisk4` の 2 つのディスク・ドライブ、データ用ボリューム・グループ `db2vg`、インデックス用のディスク・ドライブ `hdisk3` とボリューム・グループ `db2vg` を使用する場合、`creispblv.ksh` ファイルの以下の行

```
mklv -a c -y lvispbdata -ex -u1 db2vg 32 hdisk1  
mklv -a c -y lvispbindex -ex -u1 db2vg 24 hdisk1
```

を、次のように変更します。

```
mklv -a c -y lvispbdata -ex -u2 newvg 32 hdisk3 hdisk4  
mklv -a c -y lvispbindex -ex -u1 newvg 24 hdisk3
```

注: 「データベース構成パラメーターを変更しますか (Change Database Configuration Parameter)」という質問に「はい」と答える前に、必ず creispblv.ksh ファイルを編集および保管するようにしてください。追加のディスクを使用しない場合、「いいえ」と答えて作業を続けてください。

---

## システム要件

多くの Everyplace Suite コンポーネントには、インストールする前に理解しておく必要がある特定のシステム要件および前提条件があります。本節では、コンポーネントの前提条件とコンポーネントの自動インストールについて説明します。Everyplace Suite コンポーネントのハードウェアおよびソフトウェアに関する要件および前提条件は、32ページの表3 にリストされています。

## コンポーネントの前提条件

Everyplace Suite コンポーネントをインストールする前に、インストールするコンポーネントに必要なインストール前提条件を検討および理解しておくことが重要です。古いバージョンの前提条件が既にインストールされている場合があります。インストール・プログラムはこれを検出して、推奨されるバージョンにアップグレードするかどうかをユーザーに確認します。推奨されるバージョンにアップグレードしないと、予期しない動作を起こす場合があります。

インストール・プログラムによって、前提条件ソフトウェアを以前のバージョンにダウングレード (あるいは現行バージョンをリフレッシュ) するように勧められるインストールもあります。これは、Everyplace Suite コンポーネントの信頼性の高い統合を行うためです。

一部の Everyplace Suite コンポーネントでは、他の前提条件ソフトウェアのほかに、他の Everyplace Suite コンポーネントをインストールする必要があるものがあります。表1 にこれらの前提条件コンポーネントをリストします。

表1. Everyplace Suite コンポーネントおよびその前提条件コンポーネント

Everyplace Suite コンポーネント	前提条件コンポーネント
Everyplace Authentication Server	<ul style="list-style-type: none"><li>• Edge Server Caching Proxy</li><li>• Tivoli Personalized Services Manager (ドメイン内)</li></ul>
Everyplace Wireless Gateway	<ul style="list-style-type: none"><li>• IBM DB2 ユニバーサル・データベースまたは Oracle Database (ドメイン内)</li></ul>
Tivoli Personalized Services Manager	<ul style="list-style-type: none"><li>• WebSphere Application Server</li><li>• IBM DB2 ユニバーサル・データベースまたは Oracle Database (ドメイン内)</li><li>• IBM HTTP Server</li></ul>

表 1. *Everyplace Suite* コンポーネントおよびその前提条件コンポーネント (続き)

Everyplace Suite コンポーネント	前提条件コンポーネント
Edge Server Load Balancer	• Edge Server Caching Proxy

**注:** *Everyplace Suite* コンポーネントを実行するには、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) インプリメンテーションが必要です。 *Everyplace Suite* は、SecureWay Directory バージョン 3.2 でのみインプリメントされる特定のディレクトリー・スキーマに依存しています。したがって、SecureWay Directory はすべての *Everyplace Suite* コンポーネントの前提条件ということになります。 *Everyplace Suite* ドメインに SecureWay Directory をインストールすることを強くお勧めします。 SecureWay Directory 以外の LDAP インプリメンテーションを使用して *Everyplace Suite* をインストールまたは使用する場合、あらかじめ IBM の技術担当者に相談するようにしてください。

### 前提条件の自動インストール

インストール・プログラムで選択したコンポーネントおよびシステム構成オプションに従って、サポート・ソフトウェアを自動的にインストールするインスタンスがあります。以下のコンポーネントをインストールすると、対応するコンポーネントが自動的にインストールされます。

- **SecureWay Directory:** このコンポーネントをインストールすると、IBM DB2 および IBM HTTP Server が自動的にサーバーにインストールされます。
- **Tivoli Personalized Services Manager:** このコンポーネントをインストールすると、WebSphere Application Server および IBM HTTP Server が自動的にインストールされます。
- **Everyplace Authentication Server:** このコンポーネントをインストールすると、Caching Proxy が自動的にインストールされます。
- **Edge Server Caching Proxy:** このコンポーネントをインストールすると、Edge Server Load Balancer 管理パッケージおよびデバイス・ドライバーが自動的にインストールされます。

### ハードウェア要件およびソフトウェア要件

*Everyplace Suite* は、AIX バージョン 4.3.3 および Solaris バージョン 7 プラットフォーム上でのみ稼働します。

*Everyplace Suite* コンポーネントのインストールは、AIX または Solaris X-Window ワークステーション上で行わなければなりません。リモート X-Window セッションまたはエミュレーターからのインストールはサポートしておらず、問題が発生する原因になります。

Everyplace Suite では、Everyplace Suite コンポーネントをインストールするすべてのサーバーに Sun Microsystems Java<sup>®</sup> Development Kit (JDK) バージョン 1.1.8 をインストールする必要もあります。

- AIX システムの場合、JDK は製品 CD に含まれており、自動的にインストールされます。
- Solaris システムの場合、JDK を別個にインストールする必要があります。ダウンロードおよびインストールの説明については、Web サイト <http://www.sun.com/software/solaris/java/archive.html> を参照してください。

### **AIX プログラム一時修正 (PTF) の適用**

AIX システムに Everyplace Suite をインストールする前に、SMIT を使用して、システムに以下の PTF を適用するようにしてください。リストされているバージョン番号以降のものをインストールするようにしてください。以下にリストされているものに対応する基本レベル・ファイルセットは、PTF をインストールする前にインストールしておく必要があります。これらは、AIX 4.3.3 インストール・メディア上にあります。

- X11.adt.lib 4.3.3.10
- bos.adt.include 4.3.3.10
- X11.adt.motif 4.3.3.10
- bos.adt.prof 4.3.3.10

### **SecureWay Directory への AIX PTF の適用**

Everyplace Authentication Server、Tivoli Personalized Services Manager または SecureWay Directory をインストールする場合は、SecureWay Directory クライアントがインストールされます。このクライアントは、以下の PTF もマシン上にインストールしておく必要があります。

- X11.Dt.lib 4.3.3.10
- X11.Dt.rte 4.3.3.10
- X11.base.lib 4.3.3.10
- X11.base.rte 4.3.3.10
- X11.compat.lib.X11R5 4.3.3.10
- X11.motif.lib 4.3.3.10
- X11.motif.mwm 4.3.3.10
- bos.rte.libpthreads 4.3.3.10

さらに、SecureWay Directory は以下の PTF もインストールする必要があります。

- bos.adt.include 4.3.3.10
- bos.adt.prof 4.3.3.10
- bos.adt.samples 4.3.3.12
- bos.diag.com 4.3.3.13

- bos.diag.rte 4.3.3.13
- bos.net.ipsec.keymgt 4.3.3.10
- bos.net.nfs.client 4.3.3.10
- bos.net.tcp.client 4.3.3.14
- bos.net.tcp.server 4.3.3.14
- bos.rte.aio 4.3.3.11
- bos.rte.control 4.3.3.10
- bos.rte.libc 4.3.3.13
- bos.rte.net 4.3.3.1
- bos.rte.tty 4.3.3.10
- bos.sysmgt.serv\_aid 4.3.3.13
- bos.sysmgt.trace 4.3.3.11
- bos.up 4.3.3.16 (または bos.mp 4.3.3.16 )
- devices.chrp.base.rte 4.3.3.12
- devices.common.base.diag 4.3.3.10
- devices.ssa.disk.rte 4.3.3.10
- perfagent.tools 2.2.33.10
- bos.diag.util 4.3.3.11
- X11.adt.motif 4.3.3.12
- X11.adt.lib 4.3.3.10
- bos.rte.methods 4.3.3.13

## Java バージョン 1.2.2 への AIX PTF の適用

AIX システムに Tivoli Personalized Services Manager をインストールする場合、IBM AIX Developer Kit、Java™2 Technology Edition バージョン 1.2.2 をインストールする必要があります。Java バージョン 1.2.2 を実行するには、以下の AIX PTF が必要です。リストされているバージョン番号以降のものをインストールするようにしてください。

- bos.adt.include 4.3.3.1
- bos.net.tcp.client 4.3.3.3
- bos.sysmgt.serv\_aid 4.3.3.2
- X11.base.lib 4.3.3.2
- X11.adt.motif 4.3.3.1
- X11.base.rte 4.3.3.2
- X11.Dt.rte 4.3.3.3
- X11.motif.mwm 4.3.3.1



- X11.motif.lib 4.3.3.2
- X11.compat.lib.X11R5 4.3.3.2
- bos.rte.libpthreads 4.3.3.3
- bos.adt.prof 4.3.3.3
- X11.Dt.lib 4.3.3.2

また、システムが単一プロセッサのマシンであるかマルチプロセッサのマシンであるかによって、以下のいずれかをインストールします。

- bos.up 4.3.3.3 (単一プロセッサ)
- bos.mp 4.3.3.3 (マルチプロセッサ)

上記の PTF は、すべてのロケール用のもので、AIX 4.3.3 インストール・メディア上にはありません。AIX システム上にまだこれがない場合、IBM から入手することができます。アップグレードする最も簡単な方法は、<http://service.software.ibm.com/cgi-bin/support/rs6000.support/downloads> で入手することのできる FixDist ツールを使用する方法です。

Java™2 Technology Edition バージョン 1.2.2 には、特定ロケール用または 2 バイト文字セット (DBCS) ロケール用の以下の AIX 基本レベル・ファイル・セットが必要です。これらをまだインストールしていない場合は、AIX 4.3.3 インストール・メディア上にあります。

- bos.loc.com.utf 4.3.3.0
- bos.iconv.Vi\_VN 4.3.0.0
- bos.loc.iso.zh\_TW 4.3.3.0

このほか、Java バージョン 1.2.2 では、上記にリストしたインストール済みの基本レベル・ファイル・セットとともに、特定ロケール用または DBCS ロケール用の以下の PTF を AIX システムに適用することが必要です。

- bos.loc.iso.th\_TH 4.3.3.1
- bos.loc.iso.Vi\_VN 4.3.3.1
- bos.loc.iso.zh\_TW 4.3.3.1

## Oracle Database への AIX PTF の適用

Oracle Database と共に Tivoli Personalized Services Manager をインストールする場合、必ず以下の AIX ファイルセットを適用してください。これらは、AIX V4.3.3 インストール・メディア上にあります。

- bos.adt.\*
- xlC.rte.\*
- X11.adt.\*
- X11.base.\*

- perl.rte.\*
- bos.compat.termcap
- bos.sysmgt.trace
- devices.ssa.disk.rte
- さらに、すべての AIX コンポーネントを AIX 4.3.3 保守レベル 02 (IY06844) またはそれ以上に更新してください。

また、Java2 を使用して、以下のファイルセットをインストールする必要があります。

- Java\_dev2.rte.\* (Java Runtime Environment)
- Java\_dev2.ext.plugin (Java PlugIn for Netscape)
- さらに、すべての Java ファイルセットを PTF 07 (IY12075) に更新してください。

**注:** 上記のファイルセットにおいて、\* は先行するテキストで始まるすべてのファイルセットを示します。たとえば、bos.adt.\* は、bos.adt で始まるすべてのファイルセットを示しています。

## ディスク・スペース要件

表2 は、Everyplace Suite コンポーネントおよびキー・ディレクトリーの最小ディスク・スペース要件を示しています。必要なディスク・スペース量は、インストールするコンポーネントによって異なります。コンポーネントのインストールに必要となる以下のディスク・スペース要件は、AIX システムの /usr ディレクトリーおよび Solaris システムの /opt ディレクトリーのものです。

表2. Everyplace Suite のディスク・スペース要件

Everyplace Suite コンポーネント	最小ディスク・スペース要件
Everyplace Authentication Server	20MB
Wireless Gateway	Gateway 250MB Gatekeeper 50MB
MQSeries Everyplace	11MB
Edge Server Load Balancer	60MB
Edge Server Caching Proxy	100MB
Tivoli Personalized Services Manager	Subscription Manager 75MB デバイス・マネージャー 45MB
WebSphere Transcoding Publisher	80MB
IBM DB2 ユニバーサル・データベース	サーバー 350MB クライアント 150MB
WebSphere Application Server	100MB
IBM HTTP Server	40MB
SecureWay Directory	100MB
Everyplace Synchronization Manager	190MB
Everyplace Administration Console	1MB

表2. *Everyplace Suite* のディスク・スペース要件 (続き)

Everyplace Suite コンポーネント	最小ディスク・スペース要件
ローカル・ディレクトリー	
/	40MB
/usr (AIX のみ)	インストールする全コンポーネントの合計 MB
/opt (AIX のみ)	100 MB (Edge Server Caching Proxy をインストールしている場合)
/opt (Solaris のみ)	インストールする全コンポーネントの合計 MB
/db	1500MB
/home	100MB
/tmp	100MB
/var	50MB
/var/adm/logs (Tivoli のみ)	30MB

**Tivoli Personalized Services Manager に対する特別なファイル・システム要件:**

AIX システムに Tivoli Personalized Services Manager をインストールする場合、  
/var/adm/logs ファイル・システムをインストールする必要があります。これは、以下の  
コマンドで実行することができます。

```
crfs -v jfs -g'rootvg' -asize='49152' -m'/var/adm/logs' -Ayes
mount /var/adm/logs
```

Oracle database をインストールしている場合は、次のように、hdisk1 上に Oracle ポリ  
ューム・グループ 'oravg' を作成する必要があります。

```
mkvg -f -y'oravg' -s'8' hdisk1
mount /db
```

注: -s8 は、物理区画サイズです。ドライブのサイズによって、1、2、4、8、16、32 を  
使用してください。

次のコマンドを使って 'oravg' ポリューム・グループ上にファイル・システム /db を作  
成することができます。

```
crfs -v jfs -g'oravg' -asize=' 4128768' -m'/db' -Ayes
```

**コンポーネント特定の要件および前提条件**

以下の表は、各コンポーネントのシステム要件および前提条件を示しています。現行の  
前提条件情報についての詳細は、75ページの『Everyplace Suite コンポーネントの資料  
の検索方法』にリストされているコンポーネント特定の資料を参照してください。

表3. ハードウェアおよびソフトウェアの要件および前提条件

Everyplace Suite コンポーネント	要件および前提条件
Everyplace Authentication Server	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Edge Server Caching Proxy (各インスタンスごとに)</li> <li>• Tivoli Personalized Services Manager (ドメイン内)</li> </ul>
Everyplace Wireless Gateway	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 UDB エンタープライズ版 7.1 または Oracle8i database バージョン 8.1.5</li> <li>• MERANT Data Direct Connect ODBC 3.6.0 (Oracle8i を使用する場合)</li> <li>• IBM GSKit SSL Library</li> <li>• 以下のパケット無線ネットワークのいずれかに接続する場合、IBM X.25 co-processor カード。 <ul style="list-style-type: none"> <li>- ARDIS-X.25</li> <li>- DataTAC-5000</li> <li>- Mobitex</li> <li>- Modacom-SCR</li> <li>- MCA バスの RS/6000<sup>®</sup> マシン: IBM X.25 Interface Co-processor/2 カード</li> <li>- ISA バスの RS/6000 マシン: IBM X.25 Interface Co-Processor/1 カード</li> </ul> </li> </ul> <p>注: ARDIS、DataTAC-SCR、または Mobitex に、X.25 ではなく IP で接続する場合、X.25 Interface co-processor カードは必要ありません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• RS232 通信 (たとえば、PSTN、GSM、または AMPS) を使用して回線交換セルラー・ネットワークに接続する場合、非同期アダプターおよびモデム</li> <li>• IP ネットワーク、および DataTAC-TCP、Mobitex-TCP、または RNC3000 無線ネットワークの RNG への接続用 LAN アダプター</li> <li>• AIXLinkX.25 1.1.5 (X.25 接続を使用する場合)</li> </ul>
Edge Server Load Balancer	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Edge Server Caching Proxy -- コンテンツ・ベース・ルーティング (CBR) サブコンポーネントをインストールする場合</li> </ul>
Edge Server Caching Proxy	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Edge Server Load Balancer -- 管理パッケージおよびデバイス・ドライバ</li> <li>• IBM GSKit SSL Library</li> <li>• 4GB の Ultra SCSI ディスクまたは 16GB の SSA ディスク</li> </ul>

表3. ハードウェアおよびソフトウェアの要件および前提条件 (続き)

Everyplace Suite コンポーネント	要件および前提条件
Tivoli Personalized Services Manager	<ul style="list-style-type: none"> <li>• WebSphere Application Server スタンダード版 3.5</li> <li>• DB2 UDB 7.1 または Oracle8i database バージョン 8.1.5 以降</li> <li>• JDK 1.2.x で使用するための 8.1.6.0.1 JDBC ドライバー (Oracle を使用する場合)</li> <li>• IBM C compiler 5.01 for AIX</li> <li>• Perl 5 用 DBI/DB Perl モジュール</li> <li>• IBM HTTP Server 1.3.12</li> <li>• 2GB の RAM、2GB のハード・ディスク・スペース (別々のボリューム ID にすることをお勧めします)</li> </ul>
Everyplace Synchronization Manager	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 クライアント 7.1</li> <li>• Lotus Notes (Unix サーバー) と同期化している場合は Lotus Notes/Domino 5 サーバー (ローカル・マシン上)</li> <li>• Microsoft Exchange と同期化している場合は Microsoft Exchange Server 5.5 (Windows NT 4 または Windows 2000 サーバー)</li> </ul>
Everyplace Administration Console	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Netscape Navigator 4.08、または</li> <li>• Netscape Communicator 4.5 以降</li> </ul>

## サポートするデバイスおよびネットワーク・タイプ

Everyplace Suite コンポーネントは、34ページの表4 にリストされているデバイスおよびネットワーク・タイプをサポートします。注がない限り、Everyplace Suite は、完全なセキュリティー、接続および最適化の機能のために、指定プラットフォームにはワイヤレス・クライアント・コードを含みません。

表 4. サポートするデバイスおよびネットワーク・タイプ

Everyplace Suite コンポーネント	サポートするプラットフォームおよびネットワーク・タイプ
Everyplace Wireless Gateway	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Microsoft® Windows® CE 2.0 および 2.11</li> <li>• Windows CE (PPC)<sup>1</sup></li> <li>• Windows CE V3.0<sup>1</sup></li> <li>• Microsoft Windows 95 および 98</li> <li>• Microsoft Windows NT</li> <li>• Microsoft Windows 2000</li> <li>• Palm OS</li> <li>• EPOC<sup>1</sup></li> <li>• EPOC 以前の WAP 電話</li> <li>• QNX/Neutrino</li> <li>• WAP 電話 (1.1 および 1.2)<sup>2</sup></li> </ul>
WebSphere Transcoding Publisher	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows CE</li> <li>• Microsoft Windows 95</li> <li>• Microsoft Windows 98</li> <li>• Microsoft Windows NT</li> <li>• Microsoft Windows 2000</li> <li>• Palm OS</li> <li>• EPOC</li> <li>• EPOC 以前の WAP 電話</li> <li>• i モード</li> </ul>
Tivoli Personalized Services Manager (デバイス・マネージャー)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows CE</li> <li>• Palm OS</li> <li>• QNX/Neutrino</li> </ul>
MQSeries Everyplace	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Windows CE</li> <li>• Microsoft Windows 95</li> <li>• Microsoft Windows 98</li> <li>• Microsoft Windows NT</li> <li>• Microsoft Windows 2000</li> <li>• Palm OS</li> <li>• EPOC</li> <li>• Java JVM 1.1 以降を実行できるすべてのデバイス</li> </ul>

表4. サポートするデバイスおよびネットワーク・タイプ (続き)

Everyplace Suite コンポーネント	サポートするプラットフォームおよびネットワーク・タイプ
Everyplace Synchronization Manager	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Palm OS</li> <li>• Windows CE</li> <li>• Pocket PC</li> <li>• EPOC (将来サポートされる予定)</li> </ul>

注: 1. これらのデバイスは、WAP 対応クライアント (デバイスで IBM コードを必要としない)、または標準 PPP 対応クライアントとしてサポートします。完全な接続性をサポートしますが、最適化、セキュリティーについては不十分であり、データ暗号化は行いません。

注: 2. これらのデバイスは、WAP 対応クライアント (デバイスで IBM コードを必要としない) としてのみサポートします。

---

## そのほかの計画情報

ネットワークの計画および設計に関する問題については、以下の WebSphere Everyplace Suite Redbooks で詳細に説明されています。

- 「*An Introduction to WebSphere Everyplace Suite Version 1.1*」では、Everyplace Suite に関する管理用タスクのほかに、Everyplace Suite が提供するサービスおよび機能について説明しています。
- 「*Implementing WebSphere Everyplace Suite Version 1.1*」では、セキュリティーおよび認証に関する問題のほかに、予想されるパフォーマンスおよび計画について説明しています。

これらは、<http://www.redbooks.ibm.com> にてオンラインで入手可能です。

---

## 既存製品の Everyplace Suite 環境への移行

一部のインスタンスでは、古いバージョンの Everyplace Suite コンポーネントまたは前提条件が既にインストールされている場合があります。インストール・ウィザードはこれを検出して、推奨されるバージョンにアップグレードするかどうかをユーザーに確認します。推奨されるバージョンにアップグレードしないと、予期しない動作を起こす場合があります。

ウィザードによって、インストールするコンポーネントまたは前提条件を以前のバージョンにダウングレード (あるいは現行バージョンをリフレッシュ) するように勧められるインスタンスもあります。これは、Everyplace Suite コンポーネントの信頼性の高い統合を行うためです。

Everyplace Suite ドメインに SecureWay Directory をインストールすることを強くお勧めします。



---

## 第3章 Everyplace Suite のインストール

この章には、Everyplace Suite のインストールおよび構成に必要な情報および説明が記載されています。

---

### README ファイルの最新情報

Everyplace Suite のインストールを始める前に、必ず README ファイルをお読みください。README ファイルには、インストールの最新ニュース、ヒント、およびハードウェアとソフトウェアの前提条件情報が含まれています。

インストール・ウィザードを開始して、README ファイルを表示するオプションを選択すると、README ファイルを表示することができます。また、1 番の CD の /info ディレクトリーに HTML 形式で入っています。

---

### インストール前のチェックリスト

インストール中の問題やエラーを回避するためには、インストール・プロセスを開始する前に以下の情報をよく読んでおくことが重要です。

- 1. Everyplace Suite コンポーネントのインストール前に、25ページの『システム要件』にあるハードウェアおよびソフトウェアの要件をよくお読みください。
- 2. インストール・プログラムの開始前に、55ページの『障害追及』の節をよくお読みください。
- 3. Everyplace Suite のインストール・ウィザードを開始する前に、必ず実行中のすべてのプログラムを終了してください。
- 4. Solaris システムの場合は、JDK 1.1.8 が別個にインストールされていなければ、インストール・プログラムを実行することはできません。ダウンロードおよびインストールの説明については、Web サイト <http://www.sun.com/software/solaris/java/archive.html> を参照してください。
- 5. Everyplace Administration Console を実行するには、Netscape Navigator 4.08 またはそれ以上、あるいは Netscape Communicator 4.5 またはそれ以上のいずれかがインストールされている必要があります。
- 6. インストール時に次の Everyplace Suite コンポーネント用にユーザー ID およびパスワードを提供する準備をしておいてください。
  - SecureWay Directory
  - Edge Server Caching Proxy
  - Tivoli Personalized Services Manager
  - IBM HTTP Server
  - IBM DB2 UDB

- WebSphere Application Server
  - Everyplace Administration Console
- 7. Tivoli Personalized Services Manager をインストールする場合は、インストールの前に 23ページの『Tivoli Personalized Services Manager インストール前の要件』を参照してください。
  - 8. Oracle Database を使用している場合は、40ページの『Oracle database ソフトウェアのインストール』に略述されているように、Everyplace Suite のインストールの前に必ず Tivoli Oracle integration パッケージおよび Oracle8i ソフトウェアをインストールしてください。Tivoli Personalized Services Manager の RADIUS サブコンポーネントをインストールする場合は、Tivoli Personalized Services Manager のインストールの前に必ず Oracle8i インストール CD から Oracle クライアントをインストールしてください。
  - 9. Everyplace Synchronization Manager は、Everyplace Suite インストール・プログラムではインストールされません。Everyplace Suite 製品 CD の CD 番号 11 から、単独でインストールされます。インストールの説明と要件については、CD 11 の /esm/docs ディレクトリーにある資料を参照してください。
  - 10. Everyplace Suite は、SecureWay Directory バージョン 3.2 にのみ実装されている特定のディレクトリー・スキーマを利用します。したがって、SecureWay Directory をすべての Everyplace Suite コンポーネントの前提条件と見ることができます。SecureWay Directory が、すべての Everyplace Suite ドメイン内に配置されているよう、強くお勧めします。

---

## インストール・イメージの作成

すでに Everyplace Suite インストール CD を持っている場合は、この節を飛ばして、39ページの『インストール CD のディレクトリー構造』の節に進むことができます。Everyplace Suite は、11 個の大きなファイルから成り立っており、これらがインターネットからダウンロードされます。これらのファイルは、Everyplace Suite のインストールに使用される 11 個の CD または CD イメージに対応しています。ファイルは、tar 形式 (.taz の拡張子付き) に圧縮されており、抽出する必要があります。インストール CD のイメージを展開するターゲット・マシン上には、ローカル・ディスクに少なくとも 5GB のスペースがあることを確認してください。インストール・イメージを作成するには、次のステップに従ってください。

1. 以下をタイプ入力して、それぞれの CD ごとに抽出先のディレクトリーを作成します。

```
mkdir /cd1
mkdir /cd2
mkdir /cd3
```

すべての CD イメージに対して、以上のように行います。CD イメージに対応するディレクトリーにダウンロードします。



表 5. *Everyplace Suite* の製品 CD およびその内容 (続き)

CD の番号	内容
CD 7	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Edge Server Caching Proxy (パート 2)</li> <li>• Edge Server Load Balancer (パート 2)</li> <li>• Everyplace Wireless Gateway</li> <li>• WebSphere Transcoding Publisher</li> </ul>
CD 8	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Tivoli Personalized Services Manager</li> <li>• Everyplace Authentication Server</li> <li>• Everyplace Administration Console</li> </ul>
CD 9	<ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM DB2 ユニバーサル・データベース (DBCS バージョン -- AIX)</li> </ul>
CD 10	<ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM DB2 ユニバーサル・データベース (DBCS バージョン -- Solaris)</li> </ul>
CD 11	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Everyplace Synchronization Manager</li> </ul>

## Oracle database ソフトウェアのインストール

データベース管理システムに IBM DB2 ユニバーサル・データベース ではなく Oracle Database のソフトウェアを使用する場合、Oracle Database のインストールには必ず次の指示に従ってください。

Tivoli Personalized Services Manager の RADIUS サブコンポーネントをインストールする場合は、Tivoli Personalized Services Manager のインストールの前に必ず Oracle8i インストール CD から Oracle クライアントをインストールしてください。

Tivoli Personalized Services Manager サブコンポーネント (RADIUS または Oracle database integration パッケージを除く) をインストールする場合は、Oracle JDBC ドライバー (classes12\_01.zip) のコピーを同じマシン上に配置する必要があります。AIX または Sun systems でこれを行う場合の方法については、44ページの20 のステップまたは 48ページの18 のステップを参照してください。

## AIX での Tivoli Oracle integration パッケージのインストール

Everyplace Suite 用に Oracle Database の管理システムをインストールする前に、Tivoli Internet Services Management - Oracle Database Integration パッケージ (1.1.0.0) がインストールされていなければなりません。これにより、Oracle Database ソフトウェアの統合が Tivoli Personalized Services Manager 環境で促進されます。

以下のようにして、AIX で Tivoli Oracle integration パッケージをインストールします。

1. root としてログインします。

2. Everyplace Suite の 8 番の CD を CD ドライブに入れます。

3. CD をマウントします。

- 次のコマンドを入力して、ルート・ディレクトリーにディレクトリー /cdrom を作成します (存在しない場合)。

```
mkdir /cdrom
```

ルート・ディレクトリーに移動するには、次のように入力します。

```
cd /
```

- 次のコマンドを入力します。

```
mount -rv cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

CD を取り外すには、次のコマンドを入力します。

```
umount /cdrom
```

4. 次を入力して smit を実行します。

```
smit
```

- 「ソフトウェアのインストールおよび保守」を選択します。
- 「ソフトウェアのインストールおよび更新」を選択します。
- 「最新の使用可能なソフトウェアからのインストールおよび更新」を選択します。
- 「ソフトウェアのための入力デバイス/ディレクトリー」に対して、次のように入力します。

```
/cdrom/tsm/aix/oracle/sm
```

- 「インストールするソフトウェア」のリストを選択します。
- 次のものだけをインストールします。
  - 1.1.0.1 Tivoli Internet Services Manager - Oracle Database Integration
  - 1.1.0.1 Tivoli Internet Services Manager - Japanese Language Files
- インストールが終了したならば、

```
umount /cdrom
```

と入力して CD をアンマウントし、CD ドライブから取り外します。

## Oracle8i CD を使用して Oracle Database をインストールする

Tivoli パッケージがインストールされていれば、次のステップに従って、Oracle8i database ソフトウェアのインストールに進むことができます。

1. コマンド行で、(Korn シェルに) 次のように入力します。

```
export DISPLAY=:0.0
```

そして、次のように入力します。

```
xhost +
```

次のメッセージが表示されます。

アクセス制御を使用しません。すべてのホストからクライアントが接続できます。

(Access control disabled, clients can connect from any host.)

このメッセージが表示されず、下記のメッセージが表示される場合があります。

1346-217 xhost: アクセス制御を使用するまたは使用しないようにするには、ローカル・マシン上でなければなりません。

(must be on local machine to enable or disable access control.)

(Korn シェルに) 次のように入力します。

```
export DISPLAY=HOSTNAME:0.0
```

そして、次のように入力します。

```
xhost + HOSTNAME
```

2. Oracle8i CD を CD-ROM ドライブに入れて、次のコマンドを入力します。

- `cd /usr/TivTSM/install/db/oracle`
- `export PATH=$PATH:/usr/TivTSM/install/db/oracle`
- `./TSMOracle8i`

3. 次のメッセージが表示された後、**Enter** キーを押します。

Please place the Oracle CD in Drive

4. 「dba」グループおよび「oracle」ユーザーを作成するかどうかの問いに対して、「はい」と答えます。

- 5.

What is the 'mount point' for Oracle user's home?

という問いに対して、次のように入力します。

```
/db
```

**注:** マウント・ポイントを /db に指定することは、非常に重要です。

この時点で、下記のメッセージが表示されるはずです。

```
Installing Oracle8i software.  
Initializing the Java Virtual Machine. This may take up to 10 minutes.
```

この後、次のメッセージが表示されるはずです。

```
Install phase starts, updates every 15 seconds.
```

10 ~ 15 分たってもこのメッセージが表示されない場合は、インストールを終了して、可能なエラーに関するエラー・ログを検査してください。インストールは、ハードウェアによって異なりますが、この時点から 20 ~ 90 分かかります。

6. インストールが完了したら、ローカルの bin ディレクトリーの絶対パス名を問うプロンプトが出されます。次のデフォルト値を受け入れます。

```
/usr/local/bin
```

7. この後、次のように問われます。

```
Enter instance name to be created, or 'q' to abort:
```

インスタンス名 'ispb' を入力し、Enter を押します。

8. この後、次のように問われます。

```
How many subscribers in this database?
```

加入者の最小数は 10,000 です。最大数はハードウェアによって制限されます (1 ユーザーにつき 16k )。

9. この後、次のように問われます。

```
Do you want logging on or off for this install? (n/f?)
```

'n' を押します。

10. この後、次のように問われます。

```
Press 'Enter' to review/update file /db/creisplv.ksh
```

Enter を押します。スクリプト・ファイル creisplv.ksh が表示されます。情報が正しければ、保管せずにファイルを終了します。この情報は自動的に /usr/TivTSM/install/db/oracle/dbcalc.log 保管されます。

11. 継続したいかどうか尋ねられた場合は、'y' と入力します。スクリプトは、続けて論理ボリュームを実行し、作成します。インスタンス名に ispb を使用する場合は、tail -f /usr/TivTSM/install/db/oracle/./sqlispb.log を表示して詳細を見ることが出来ます。

12. この後、次の項目について問われます。

- locale: デフォルト=en (日本語の場合は ja)
- password for db user 'system': デフォルト=manager
- schema owner: デフォルト=stage\_master
- schema user: デフォルト=stage\_user

これらの項目についてはデフォルト値のみ有効です。

13. スキーマを作成するかどうかを尋ねられた場合は、'y' を押します。

14. 次のメッセージが表示されます。

- Loading tables...

- Done loading...
  - Checking results...OK.
15. この後、次のように問われます。
- Do you need to include the Device Schema?
- デバイス管理サーバーを使用するかどうかを尋ねられた場合は、'y' を押します。
16. この後、次のように問われます。
- Do you need to load the zip codes table?
- 'y' を押します。
17. この後、次のように問われます。
- Configure LDAP Integration?
- 'y' を押します。
18. この後、次のように問われます。
- Configure eBill?
- 'y' を押します。
19. この後、次のように問われます。
- Configure Web Hosting?
- 'n' を押します。
20. Oracle JDBC ドライバー・ファイル (classes12\_01.zip) を該当するディレクトリにコピーする必要があります。このファイルは、サイト [www.oracle.com](http://www.oracle.com) からダウンロードして、以下のディレクトリにコピーすることができます。
- mkdir /usr/TivTSM/classes
  - cp classes12\_01.zip /usr/TivTSM/classes/.
  - cp /usr/TivTSM/classes/classes12\_01.zip /oracle8/jdbc/lib/.
- デバイス・マネージャー機能をインストールしている場合は、次のファイルをコピーしてください。
- ```
cp classes12_01.zip /usr/lpp/TivDMS/doc/.
```

Tivoli Personalized Services Manager を Oracle Database と共にインストールする前に、必ず下記の AIX PTF を適用してください。

- bos.sysmgt.trace
- devices.ssa.disk.rte

これで、Tivoli Personalized Services Manager を Everyplace Suite インストール・プログラムでインストールする準備が整いました。



## Solaris での Tivoli Oracle integration パッケージのインストール

Everyplace Suite 用に Oracle Database の管理システムをインストールする前に、Tivoli Internet Services Management - Oracle Database Integration パッケージ (1.1.0.0) がインストールされていなければなりません。これにより、Oracle Database ソフトウェアの統合が Tivoli Personalized Services Manager 環境で促進されます。

以下のようにして、Solaris で Tivoli Oracle integration パッケージをインストールします。

1. root としてログインします。
2. Everyplace Suite の 8 番の CD を CD ドライブに入れます。
3. CD をマウントします。
  - 次のコマンドを入力して、ルート・ディレクトリーにディレクトリー /cdrom を作成します (存在しない場合)。
4. 次のように入力して、1.1.0.0 Tivoli Internet Services Management - Oracle Database Integration をインストールします。

```
mkdir /cdrom
```

ルート・ディレクトリーに移動するには、cd / と入力します。

- CD は自動的にマウントされ、ファイル・マネージャーに表示されます。

```
admintool
```

または

```
pkgadd -d
```

- 次のように入力します。

```
/cdrom/everyp1_suite-8/tsm/sun/oracle/sm TivTISM08
```
- インストールが終了したならば、

```
umount /cdrom
```

と入力して CD をアンマウントし、CD ドライブから取り外します。

## Oracle8i CD を使用して Oracle Database をインストールする

Tivoli パッケージがインストールされていれば、次のステップに従って、Oracle8i database ソフトウェアのインストールに進むことができます。

1. コマンド行で、(Korn シェルに) 次のように入力します。

```
export DISPLAY=:0.0
```

そして、次のように入力します。

```
xhost +
```

次のメッセージが表示されます。

Access control disabled, clients can connect from any host.

このメッセージが表示されず、下記のメッセージが表示される場合があります。

```
1346-217 xhost: must be on local machine to enable or disable access control.
```

(Korn シェルに) 次のように入力します。

```
export DISPLAY=HOSTNAME:0.0
```

そして、次のように入力します。

```
xhost + HOSTNAME
```

2. Oracle8i CD を CD-ROM ドライブに入れて、次のコマンドを入力します。

- `cd /opt/TivTSM/install/db/oracle`
- `export PATH=$PATH:/opt/TivTSM/install/db/oracle`
- `./TSMOracle8i`

3. 次のメッセージが表示された後、**Enter** キーを押します。

```
Please place the Oracle CD in Drive
```

4. 「dba」グループおよび「oracle」ユーザーを作成するかどうかの問いに対して、「はい」と答えます。

- 5.

```
What is the 'mount point' for Oracle user's home?
```

という問いに対して、次のように入力します。

```
/db
```

**注:** マウント・ポイントを /db に指定することは、非常に重要です。

この時点で、下記のメッセージが表示されるはずです。

```
Installing Oracle8i software.
```

```
Initializing Java Virtual Machine. This may take up to 10 minutes.
```

この後、次のメッセージが表示されるはずです。

```
Install phase starts, updates every 15 seconds.
```

10 ~ 15 分たってもこのメッセージが表示されない場合は、インストールを終了して、可能なエラーに関するエラー・ログを検査してください。インストールは、ハードウェアによって異なりますが、この時点から 20 ~ 90 分かかります。

6. インストールが完了したら、ローカルの bin ディレクトリーの絶対パス名を問うプロンプトが出されます。次のデフォルト値を受け入れます。

```
/opt/local/bin
```

7. この後、次のように問われます。

Enter instance name to be created, or 'q' to abort:

インスタンス名 'ispb' を入力し、Enter を押します。

8. この後、次のように問われます。

How many subscribers in this database?

加入者の最小数は 10,000 です。最大数はハードウェアによって制限されます (1 ユーザーにつき 16k )。

9. この後、次のように問われます。

Do you want logging on or off for this install? (n/f?)

'n' を押します。

10. この後、次の項目について問われます。

- locale: デフォルト=en (日本語の場合は ja)
- password for db user 'system': デフォルト=manager
- schema owner: デフォルト=stage\_master
- schema user: デフォルト=stage\_user

これらの項目についてはデフォルト値のみ有効です。

11. スキーマを作成するかどうかを尋ねられた場合は、'y' を押します。

12. 次のメッセージが表示されます。

- Loading tables...
- Done loading...
- Checking results...OK.

13. この後、次のように問われます。

Do you need to include the Device Schema?

デバイス管理サーバーを使用するかどうかを尋ねられた場合は、'y' を押します。

14. この後、次のように問われます。

Do you need to load the zip codes table?

'y' を押します。

15. この後、次のように問われます。

Configure LDAP Integration?

'y' を押します。

16. この後、次のように問われます。

Configure eBill?

'y' を押します。

17. この後、次のように問われます。

Configure Web Hosting?

'n' を押します。

18. Oracle JDBC ドライバー・ファイル (classes12\_01.zip) を該当するディレクトリにコピーする必要があります。このファイルは、サイト [www.oracle.com](http://www.oracle.com) からダウンロードして、以下のディレクトリにコピーすることができます。

```
cp classes12_01.zip /opt/TivTSM/classes/.
```

デバイス・マネージャ機能をインストールしている場合は、このファイルを次のようにコピーしてください。

```
cp classes12_01.zip /opt/TivDMS/doc/.
```

これで、Tivoli Personalized Services Manager を Everyplace Suite インストール・プログラムでインストールする準備が整いました。

---

## インストール・プログラムの開始

インストールは、ダウンロードされたファイルから焼き付けた CD から、または抽出した CD イメージ・ファイルから直接、実行することができます。

### 製品 CD からのインストール

製品 CD から Everyplace Suite インストール・ウィザードを開始するには、下記のステップに従ってください。

1. root としてログインします。
2. 1 番の CD を CD ドライブに入れます。
3. CD をマウントします。
  - ルート・ディレクトリで、次のコマンドを入力して、ディレクトリ/cdrom を作成します (存在しない場合)。

```
mkdir /cdrom
```

注: ルート・ディレクトリに移動するには、cd / と入力します。

- AIX の場合は、次のコマンドを入力します。

```
mount -rv cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

CD を取り外すには、次のコマンドを入力します。

```
umount /cdrom
```

または、インストール・ウィザードからプロンプトが出されたときに「アンマウント」 ボタンをクリックします。

- Solaris の場合、CD は自動的にマウントされ、ファイル・マネージャーに表示されます。
4. 次のコマンドを入力します。  
`/cdrom/install.sh`
  5. コマンド行で、JAVA\_HOME ディレクトリーについてプロンプトが出されます。 **Enter** キーを押すか、または異なる JAVA\_HOME ディレクトリーに入力してインストール・ウィザードを開始します。
  6. 次に、Tivoli Personalized Services Manager をインストールするかどうか問われます。インストールする場合は、IBM AIX Developer Kit、Java™2 Technology Edition バージョン 1.2.2 がインストールされます。

**注:** ルート・ディレクトリーから下記のコマンドを必ず実行してください。ルート・ディレクトリーに移動するには、`cd /` と入力します。/cdrom ディレクトリーにいずれかのコマンド・ウィンドウがある場合は、CD をアンマウントすることはできません。

## ファイル・システムからのインストール

製品 CD ではなく、ダウンロードしたファイルから直接インストールする場合は、下記の指示に従ってください。ファイル・システムから Everyplace Suite インストール・ウィザードを開始するには、下記のステップに従ってください。

1. 次のように入力して、1 番の CD のディレクトリーに移動します。  
`cd cdName`  
ここで、cdName は、ダウンロードされた CD イメージ・ファイルが抽出されたディレクトリーの名前です。
2. 次のコマンドを入力します。  
`./install.sh`
3. コマンド行で、JAVA\_HOME ディレクトリーについてプロンプトが出されます。 **Enter** キーを押すか、または異なる JAVA\_HOME ディレクトリーに入力してインストール・ウィザードを開始します。
4. 次に、Tivoli Personalized Services Manager をインストールするかどうか問われます。インストールする場合は、IBM AIX Developer Kit、Java™2 Technology Edition バージョン 1.2.2 がインストールされます。

---

## Everyplace Suite のインストール

Everyplace Suite のインストールは、インストール・ウィザードで簡単に行うことができます。インストール・ウィザードは、インストールの完了に必要なすべての情報を問うプロンプトを出します。

Everyplace Suite 内のすべてのコンポーネントに関しては、インストール・ウィザードが自動的にそのコンポーネントのインストール・プログラムを使用して、正常にインストールします。また、Everyplace Suite インストール・ウィザードは、各コンポーネントがインストールされた後、それぞれのコンポーネントに限定された構成を提供する情報を使用します。

注:

1. Everyplace Synchronization Manager は、Everyplace Suite インストール・プログラムではインストールされません。Everyplace Suite 製品 CD の CD 番号 11 から、単独でインストールされます。インストールの説明と要件については、CD 11 の /esm/docs ディレクトリーにある資料を参照してください。
2. Everyplace Suite のコンポーネントをインストールする際には、これらのインストールの指示に従うことが重要です。Everyplace Suite 内のコンポーネントについてはインストール要件が異なる場合があるので、コンポーネントの資料 (Synchronization Manager を除く) にある独立型インストールの指示には従わないでください。

## インストール・ステップ

インストール処理中は、いつでも「戻る」ボタンをクリックして直前のパネルに戻り、情報の検討および変更を行うことができます。インストールが実際に始まる前に、「インストールの要約」ウィンドウですべての項目を検討する機会があります。

Everyplace Suite をインストールするには、次のステップに従ってください。

1. **資料の表示:** インストールを開始する前に「README」ファイルまたは「ご使用に際して」ガイドブックを表示するには、「資料の表示」パネルの「README」または「ご使用に際して」ボタンをクリックします。

**注: Solaris システムの場合:** インストール・ウィンドウの外側のバックグラウンド・エリアをクリックすると、インストール・ウィンドウはバックグラウンドに行き、見えなくなります。インストール・ウィンドウを元のように見えるようにするには、**Alt-Tab** キーを同時に押してください。

2. **SecureWay Directory オプションの選択:** 3 つの SecureWay Directory 情報共有オプションから 1 つを選択します。3 つのオプションは、次のとおりです。
  - 「このサーバーに **SecureWay Directory** をインストールする」: これは、ローカル・サーバー上の SecureWay Directory をインストールします。
  - 「**SecureWay Directory** サーバーから **Everyplace Suite** 情報を検索する」: これは、インストール・プログラムに指示を出して、Everyplace Suite ドメイン内の既存の SecureWay Directory (LDAP) サーバーから情報を検索します。
  - 「ファイルから既存の **Everyplace Suite** 情報を検索する」: これによって、SecureWay Directory を使用せずにインストールを実行することができるようになります。インストール情報は、後でファイル・システムまたはディスクセット・メ

ディアから検索されます。このオプションを選択すると、SecureWay Directory は、選択可能なコンポーネントとしてコンポーネントの選択パネルに表示されません。

選択するオプションによって、特定の情報についてのプロンプトが出されます。これらのオプションについての詳細は、18ページの『SecureWay Directory のインストール計画』を参照してください。

3. **インストールするコンポーネントの選択:** インストールしたいコンポーネントのチェック・ボックスを選択して、Everyplace Suite コンポーネントを選択します。すべての Everyplace Suite コンポーネントが、パネルに表示されています。どの組み合わせでインストールしても構いません。

いくつかのコンポーネントにはサブコンポーネントがあり、画面の右側に表示されます。これらのサブコンポーネントは、個々に選択することができます。

図5 は、インストール・ウィザードのコンポーネントの選択パネルを示しています。現在強調表示されているコンポーネント（この例では Everyplace Wireless Gateway）のサブコンポーネントが画面の右側に表示されています。

インストール・ウィザードは、実際にインストールが始まる前に、すべての前提条件および相互に必要なソフトウェアがインストールされるかどうかを検査します。インストール・ウィザードは、インストールが完了する前に、何らかの問題や、あるいは適合する必要のあるソフトウェア要件について通知します。

**注:** Everyplace Suite のインストールを正常に完了するために、コンポーネントか、または前提条件ソフトウェアのアップグレードが必要な場合があります。インストール・パネルの指示に従って、必要なソフトウェアの検査およびアップグレードを行います。Everyplace Suite ソフトウェアを正常に実行するために、旧バージョンのコンポーネント・ソフトウェアにダウングレードする必要がある場合もあります。推奨されるバージョンの前提条件およびコンポーネント・ソフトウェアがインストールされていない場合には、Everyplace Suite が予想通りに動作しない場合があります。



図 5. Everyplace Suite コンポーネントの選択

4. データベース管理システムの選択: コンポーネント・リストから Tivoli Personalized Services Manager または Everyplace Wireless Gateway のどちらかを選択する場合は、データベース管理システムとして DB2 UDB または Oracle のどちらかを選択する必要があります。  
これらのコンポーネントは、双方とも、IBM DB2 ユニバーサル・データベース 7.1 または Oracle database 8.1.5 のどちらかが Everyplace Suite ドメインにインストールされていなければなりません。
5. コンポーネント構成オプションの選択: Everyplace Suite 内に、現在インストールしているコンポーネントのその他のインスタンスがある場合、すでにドメイン内にあるその他のインスタンスにそれぞれのコンポーネントの構成オプションが与えられます。53ページの図6は、それぞれのインスタンスがサーバー名でリストされている様子を示しています。いずれか 1 つのインスタンスを選択して、現在選択されているコンポーネントを同じパラメーターで構成することができます。あるいは、プリインストールされているいずれの構成パラメーターも使用したくない場合、「新規構成」を選択することができます。



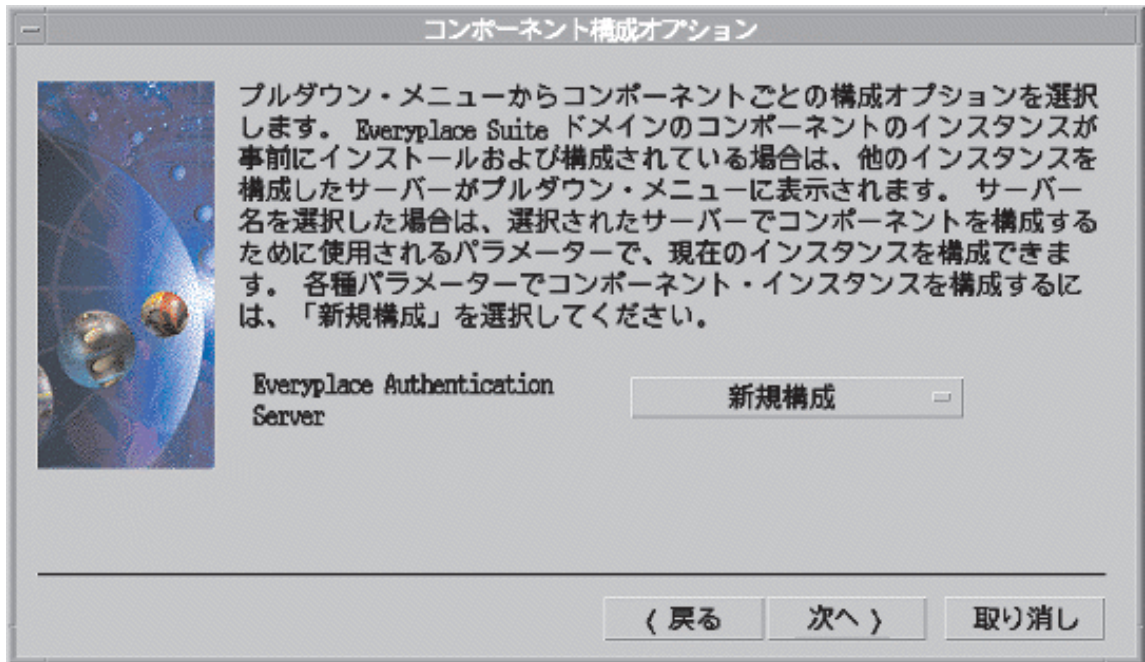


図6. コンポーネント構成オプションの選択

6. **ユーザー ID オプションの選択:** コンポーネント管理用に、単一のユーザー ID または複数のユーザー ID のいずれかを選択します。

いくつかの Everyplace Suite コンポーネントには、構成用のユーザー ID、グループ ID、およびパスワードが必要です。ID を必要とするすべてのコンポーネントを 1 つの ID で構成するオプションか、または ID を必要とするそれぞれのコンポーネントを固有の ID で構成するオプションがあります。

単一のユーザー ID のオプションを選択すると、ユーザー ID、グループ ID、およびパスワードを問うプロンプトが 1 回出ます。

それぞれのコンポーネントごとに別々の ID を選択すると、ユーザー ID、グループ ID、パスワード、およびそのコンポーネント固有のその他の情報を問うプロンプトが出ます。
7. **Authentication Server 構成情報の選択:** Authentication Server が選択されている場合は、必要な構成情報を入力するプロンプトが出ます。これを実行するためのパネルが 2 つ表示されます。
  - 最初のパネルでは、ドメイン内のすべての Authentication Server に共通の情報を問うプロンプトが出ます。この情報は SecureWay Directory 内に保管されるので、入力する必要があるのは 1 度だけです。54ページの図7 を参照してください。

- 2 番目のパネルでは、特定の Authentication Server に固有の情報を問うプロンプトが出ます。このパネルは、また、Authentication Server を認証プロキシとして、または透過認証プロキシとして構成するオプションを表示します。

Authentication Server の構成情報の提供について、詳しくは、59ページの『SecureWay Directory における Authentication Server 情報の構成』を参照してください。

図7. 共通の Authentication Server 構成情報

8. **Webmaster のユーザー ID の指定 (電子メールアドレス):** Tivoli Personalized Services Manager を選択している場合は、Web マスターのユーザー ID を `webmasterid@domain_name.com` の形式で指定します。
9. **コンポーネントの選択の確認:** 選択したコンポーネントのリストを検討して、コンポーネントの選択を確認します。

すべての選択したコンポーネント、サブコンポーネント、および構成情報が表示されます。「戻る」ボタンをクリックしてコンポーネントの選択パネルに戻り、リストが

らコンポーネントを追加または除去したり、またはその他の構成情報を変更することができます。「インストール」ボタンをクリックすると、インストールが始まります。

**注:** いずれかの Everyplace Suite コンポーネントが、SecureWay Directory ではなく LDIF ファイル (SecureWay Directory 情報共有オプションのインストール・パネル内のオプション 3) を使用してインストールされている場合は、SecureWay Directory のインストールおよび情報の LDIF ファイルから SecureWay Directory へのインポートが行われていなければなりません。詳しくは、21ページの『SecureWay Directory への LDIF ファイルのインポート』を参照してください。

## インストールの進行

インストール処理が開始すると、インストールの状況を示す進行標識が表示されます。インストール中に発生したエラーまたは問題は、後述の『障害追及』に記載されている Everyplace Suite のログ・ファイルにログインされるだけでなく、すべてここに表示されます。

## 障害追及

インストール中にエラーが発生した場合は、その特定の問題についての通知が出ます。エラー・メッセージに示されている指示に従ってください。インストール・ウィザードの終了が必要な問題もあります。インストール中には、すべてのアクションおよび結果が /tmp/everypplace.log 内のインストール・ログ・ファイルに記録されます。このファイルには、問題の識別および分析の助けとなる一連の情報が入っています。everypplace\_install.trace ファイルも /tmp ディレクトリーで使用可能で、プログラム実行についての詳細事項が含まれています。これらのファイルは ASCII テキスト形式なので、テキスト・エディターを使用して表示することができます。

Everyplace Suite をインストールする際の問題を回避または解決するために、次の項目に注意してください。

- **Solaris システムの場合のインストール・ウィンドウの消失:** インストール・ウィンドウの外側のバックグラウンド・エリアをクリックすると、インストール・ウィンドウはバックグラウンドに行き、見えなくなります。インストール・ウィンドウを元のように見えるようにするには、**Alt-Tab** キーを同時に押してください。
- **リモート X-Window セッション・インストールが動作しない:** Everyplace Suite コンポーネントのインストールは、AIX または Solaris X-Window ワークステーション上で実行しなければなりません。リモート X-Window セッションまたはエミュレーターからのインストールは、サポートされていないので、問題の原因になる場合があります。

---

## デバイス・クライアントおよびアプリケーションのインストール

Everyplace Suite コンポーネントには、パーベシブ・デバイスまたは他のプラットフォーム上にインストールされている必要のある関連クライアントおよびクライアント開発アプリケーションを持つものがあります。以下のコンポーネントには、関連するクライアントまたはアプリケーションがあります。これらのクライアントおよびアプリケーションのインストールおよび作業についての情報は、対応する資料を参照してください。

### Everyplace Wireless Gateway

Everyplace Wireless Gateway には、パーベシブ・デバイスを Wireless Gateway に接続する際に使用する Wireless Client が組み込まれています。クライアント情報は、「*Everyplace Wireless Gateway Administrator's Guide*」にあります。本書および追加情報は、下記のサイトにあります。

<http://www.ibm.com/pvc/enterprise>

### Tivoli Personalized Services Manager (デバイス・マネージャー機能)

デバイス・マネージャー (Tivoli Personalized Services Manager の一機能) には、ターゲットのパーベシブ・デバイス上にインストールされるデバイス・エージェントが組み込まれています。これらのエージェントについての情報は、デバイス・マネージャー: Device Plug-in Notes にあります。デバイス・マネージャー Plug-in Notes へのアクセスについての説明は、76 ページを参照してください。

### MQSeries Everyplace

MQSeries Everyplace は、Java および C コンポーネントから成っています。これにより、ソリューション開発者は、さまざまな装置およびプラットフォーム上で MQSeries Everyplace ゲートウェイおよびクライアントを作成することができます。

MQSeries Everyplace の固有 C クライアント・バージョンは、Everyplace Suite と共にインストールされません。これは、下記のサイトからダウンロードすることができます。

<http://www.ibm.com/software/ts/mqseries/>

次の MQSeries Everyplace 技術資料は、オンラインで入手可能です。

- 概要
- プログラミング・ガイド (Java 用)
- プログラミング解説書 (Java 用)
- 固有クライアント情報 (C 用)

これらの資料および追加情報は、下記のサイトにあります。

<http://www.ibm.com/software/mqseries/library/#books>

## Everyplace Synchronization Manager

Synchronization Manager クライアントのインストールの詳細については、Everyplace Suite 製品 CD (CD 番号 11) の /esm/docs の資料を参照してください。



---

## 第4章 Authentication Server の構成

この章では、Authentication Server の構成について説明します。以下の構成タスクを実行することができます。

- Everyplace Suite ドメイン内のすべての Authentication Server について SecureWay Directory の Authentication Server 情報を編集する。
- Authentication Server をリバース・プロキシとして構成する。この構成により、Authentication Server はクライアント要求を別のサーバーに送信することができます。
- Authentication Server を宛先変更するように構成する。この構成により、Authentication Server はクライアント要求をいくつかのサーバーの 1 つに送信することができます。
- 中断、再開、リフレッシュ、表示、フラッシュ、および active session table (AST) クリーンアップ・デーモンの開始および停止などの操作タスクを実行する。

---

### SecureWay Directory における Authentication Server 情報の構成

共通または固有の Authentication Server 設定は、インストール時に初期構成されます。共通エントリは、ドメイン内の 1 つの Authentication Server について構成を行った後、Everyplace Suite ドメイン内のすべての Authentication Server について SecureWay Directory からアクセスしたり、管理することができます。固有エントリは、ドメインにインストールされた Authentication Server ごとに、構成しなければなりません。

インストール後、Authentication Server で特定の構成設定が必要な場合は、まず SecureWay Directory の固有の設定を検索し、次に共通の設定を検索します。設定が SecureWay Directory 内がない場合、Authentication Server は、その構成ファイル `ibmwesas.conf` を検索します。

構成の設定が構成ファイルで見つからない場合、Authentication Server は、**最大 RADIUS 再試行回数**などのいくつかの数値構成設定値にはデフォルト値を使用します。

インストール完了後に Authentication Server 設定を変更するには、SecureWay Directory の設定を編集しなければなりません。Directory Management Tool を使用して、SecureWay Directory の Authentication Server 設定を見つけることができます。Directory Management Tool の使用手順については、<http://www.ibm.com/software/network/directory/library/publications/31/dmt/dparent.htm> を参照してください。

ディレクトリー管理ツールを構成するには、`/etc/dmt.conf` DMT 構成ファイルを編集します。たとえば、プロパティ・ファイルに以下の行が含まれている場合には、次のようにします。

```
#browser=  
#toolbar=both  
server1.url=ldap://localhost:389  
#server1.security.bindDN=  
#server1.security.password=  
#server1.security.ssl.keyclass=  
#server1.security.ssl.keyclass.password=  
#server1.admin.url=http://webserver:80
```

bindDN およびパスワード項目を設定して、これらの行の先頭にある “#” を削除して、変更を有効にする必要があります。例:

```
server1.security.bindDN=cn=adminusr  
server1.security.password=pssword
```

dmt を開始するには、コマンド行で dmt と入力します。

Directory Management Tool は、以下に示すように、SecureWay Directory のツリー・ビューをオープンします。



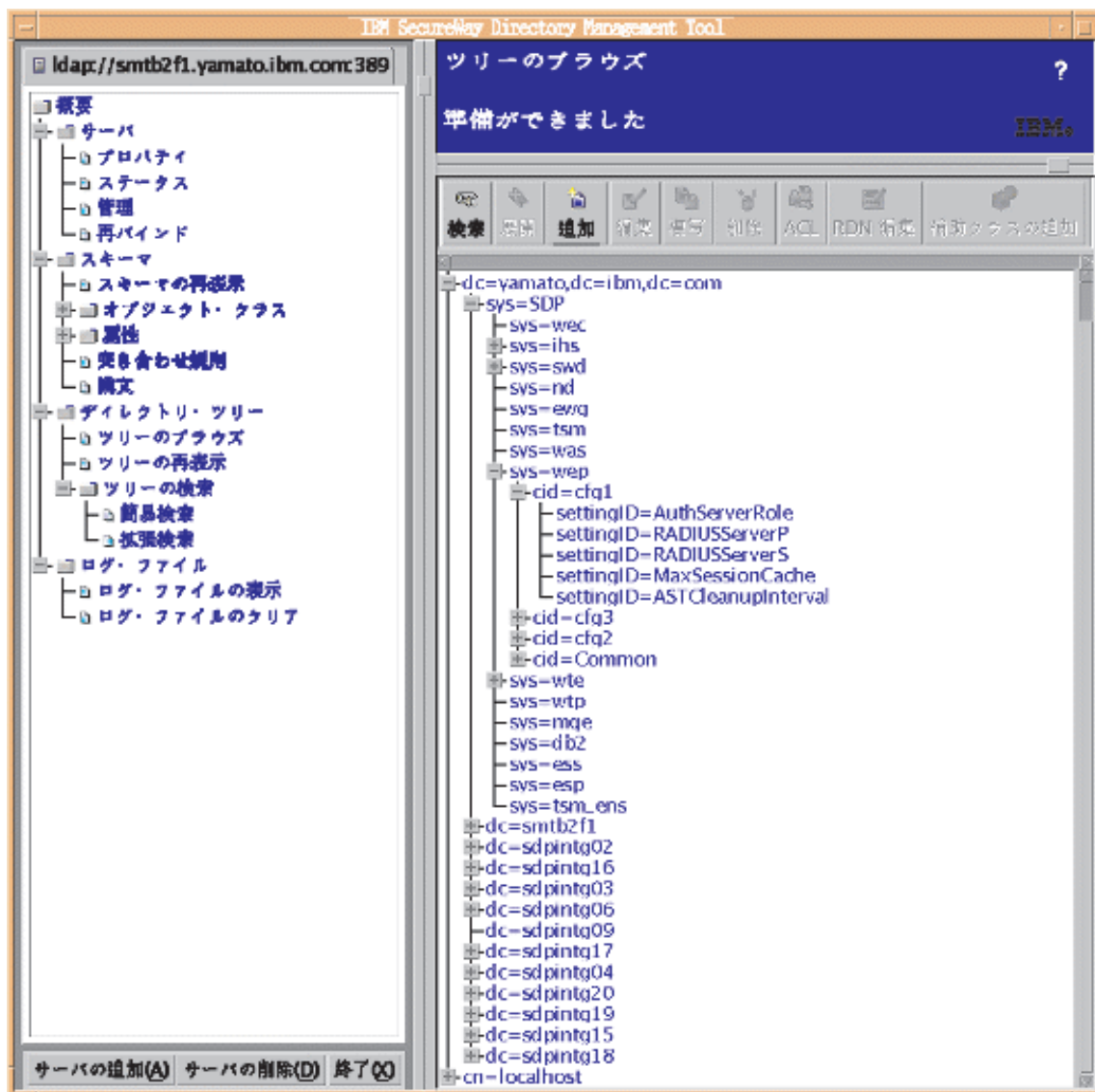


図8. SecureWay Directory の Everyplace Suite 情報の「ディレクトリー管理ツール (Directory Management Tool)」ビュー

**cid** オブジェクトは、Authentication Server 設定のタイプを示します。すべての共通 Everyplace Suite の Authentication Server 設定についての **cid** は、*common* です。固有 Everyplace Suite の Authentication Server 設定についての **cid** は、Authentication Server のホスト名と一致する *eServicePtr* 属性により生成されたトークンです。

**sys** オブジェクトは、Authentication Server サブシステムの名前を示します。すべての Everyplace Suite の Authentication Server 設定についての **sys** は、*wep* です。

Authentication Server 設定を変更するためには、以下のことを実行します。

1. Directory Management Tool を使用して、SecureWay Directory のツリー・ビューをオープンする。
2. ツリー・ビューの右側ペインの「**検索**」ボタンをクリックして、照会画面を表示する。
3. 以下の情報を指定して、設定を見つける。
  - オブジェクト・クラス: すべての Authentication Server 設定のオブジェクト・クラスは *eProperty* です。
  - settingID: 変更しようとする Authentication Server 設定の名前。
4. 検索の結果、複数の Authentication Server 設定が検出された場合は、**cid** および **sys** オブジェクトを使用して、必要な設定を見つける。固有 Authentication Server 設定の場合、**cid** オブジェクトの *eServicePtr* 属性について検索を実行します。これは、Authentication Server のホスト名と一致します。
5. Authentication Server 設定が見つかった後、以下に示すような構成ダイアログが表示される。

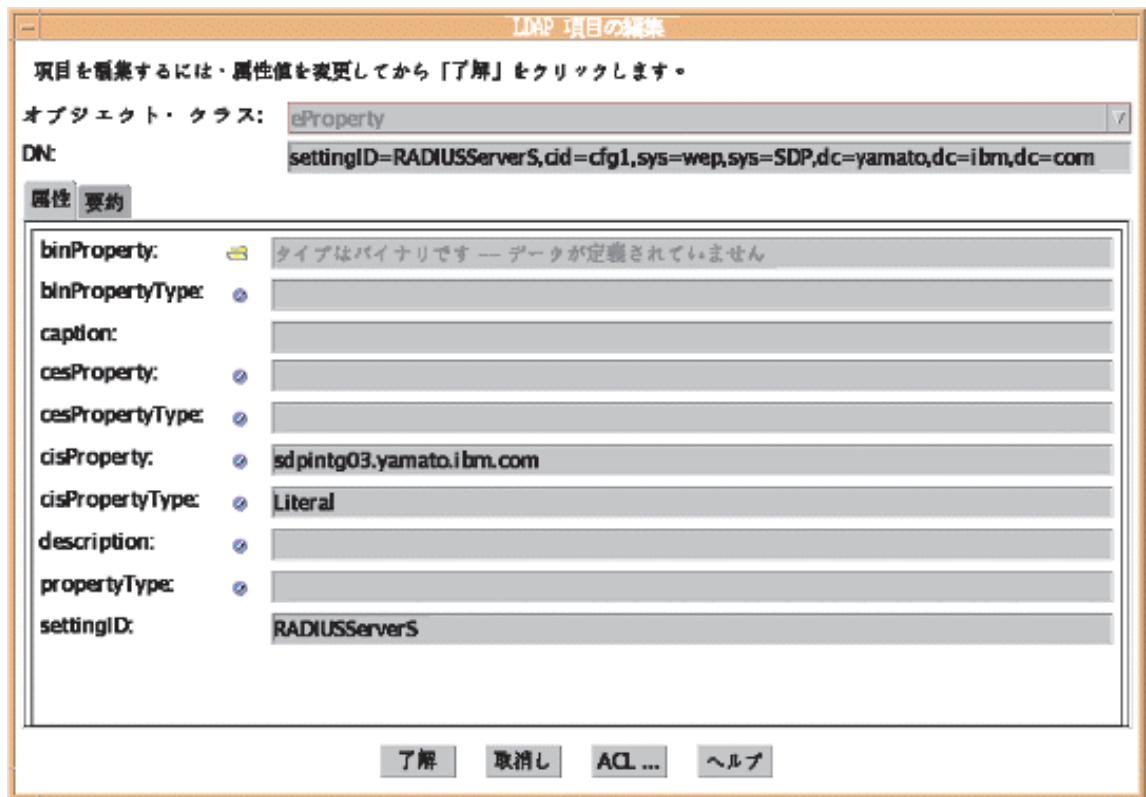


図9. SecureWay Directory 項目構成ダイアログ

**cisProperty** フィールドを編集して、Authentication Server 設定を構成します。

正しい形式を使用して、Authentication Server 設定を構成しなければなりません。たとえば、上記の図で、**RADIUSServerS** 設定を構成するには、リテラル (文字) 形式を使用しなければなりません。**cisPropertyType** フィールドには、設定を構成するために使用する形式を示します。

各設定ごとの Authentication Server 設定の説明、settingID および cisPropertyType については、以下のテーブルに示されています。

表 6. Authentication Server 項目

| Authentication Server 項目 | 説明                                                                                                                                                                                                      | SettingID          | cisProperty タイプ |
|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------|-----------------|
| 最大 RADIUS 再試行回数          | 試行が停止されるまで Authentication Server が RADIUS サーバーにUDP 認証要求の送信を試行できる最大回数。                                                                                                                                   | MaxRADIUSRetries   | Number          |
| RADIUS 共有シークレット          | RADIUS サーバーと RADIUS クライアント間で、相互認証の実行が許可される共有パスワード。                                                                                                                                                      | RADIUSSharedSecret | Literal         |
| 最大 RADIUS 再試行タイムアウト      | Authentication Server が、別のアクセス要求を送信するまで、RADIUS サーバーからの応答のために待機する最大時間 (ミリ秒単位)。Authentication Server は、指定された最大 RADIUS 再試行回数まで応答を待ちます。                                                                     | MaxRADIUSTimeout   | Number          |
| 最大セッション経過時間              | Authentication Server が、ユーザーのセッション情報を保持する最大時間 (分単位)。この時間を過ぎると、Authentication Server は情報をクリアします。ディスク・スペースなどの Authentication Server リソースは、情報が保持されている間は使用されます。しかし、一度、情報がクリアされると、再作成するためにさらに時間がかかる可能性があります。 | MaxSessionAge      | Number          |
| デフォルト再試行遅延               | Authentication Server が管理者によって中断されると、RADIUS サーバーへの要求は拒否されます。デフォルト再試行遅延は、デバイスが要求の再試行を待つデフォルトの時間 (秒単位) です。                                                                                                | DefaultRetryDelay  | Number          |

表 6. Authentication Server 項目 (続き)

| Authentication Server 項目  | 説明                                                                                                                                                                                                 | SettingID          | cisProperty タイプ |
|---------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------|-----------------|
| Authentication Server の役割 | Authentication Server は、Everyplace Suite 内のリソースへのすべての要求を代行受信する認証プロキシ、または、Everyplace Suite 認証および変換の使用中に、第 3 者のコンテンツ・サーバーによって提供されたコンテンツへのアクセスを許可する透過認証プロキシという、2 つのプロキシ・タイプまたは役割のいずれかとして動作させることができます。 | AuthServerRole     | Literal         |
| 1 次 AST サーバー名             | active session table とそのエントリーを管理するために使用される 1 次サーバーのホスト名。                                                                                                                                           | ASTServerP         | Literal         |
| 2 次 AST サーバー名             | active session table とそのエントリーを管理するために使用されるバックアップ・サーバーのホスト名 (適用可能な場合)。                                                                                                                              | ASTServerS         | Literal         |
| 1 次 RADIUS サーバー名          | 1 次 RADIUS Authentication Server のホスト名。                                                                                                                                                            | RADIUSServerP      | Literal         |
| 2 次 RADIUS サーバー名          | バックアップ RADIUS Authentication Server のホスト名 (適用可能な場合)。                                                                                                                                               | RADIUSServerS      | Literal         |
| 最大セッション・キャッシュ・サイズ         | 特定のプロキシのローカル・メモリー内のキャッシュの最大サイズ。                                                                                                                                                                    | MaxSessionCache    | Number          |
| AST デーモン・クリーンアップ間隔        | セッション情報が active session table server からクリアされる時間 (秒単位)。                                                                                                                                             | ASTCleanupInterval | Number          |

---

## デバイスおよびネットワーク・タイプの構成

Authentication Server は、SecureWay Directory に保管されている装置プロファイルに定義されているマッピング・ルールに基づき、着信要求に関連したデバイスを識別します (装置プロファイルおよびデバイス・マッピング・ルールについては、「*WebSphere Transcoding Publisher Administrator's Guide*」を参照)。 Authentication Server により、使用可能なマッピング・ルールに基づいてデバイス・タイプを決定できない場合、Authentication Server は、デフォルトのネットワークまたはデバイス・タイプを使用して、変換をインプリメントします。デフォルトのネットワーク・タイプは GENERIC\_WIRELESS です。デフォルトのデバイス・タイプは WML\_DEVICE です。

デフォルトのネットワークまたはデバイス・タイプを変更するには、SecureWay Directory パラメーターが保管されているファイルをオープンして、以下のものを検索します。

default\_device\_type

または

default\_network\_type

デフォルトのデバイス・タイプには、以下のオプションのいずれかを選択することができます。

**注:** デバイス・タイプ名では、大文字小文字が区別されます。

- WML Device : 任意の WAP 準拠のデバイス (事前定義デフォルト)
- Palm-Pilot3 HandWeb11 : Palm Pilot HandWeb ブラウザー
- NT.InternetExplorer4 : MS Internet Explorer ブラウザー (バージョン 4)
- NT.InternetExplorer : MS Internet Explorer ブラウザー (バージョン 5)
- NT.Netscape45 : Netscape Navigator ブラウザー (バージョン 4+)
- WinCE.PocketIE20 : MS Windows CE 互換デバイス
- I-Mode 501 : ワイヤレス電話 - I-Mode モデル 501i
- I-Mode 2 Color Phone: ワイヤレス電話 - I-Mode 2 カラー型
- I-Mode 2 Monochrome : ワイヤレス電話 - I-Mode 2 単色型

**注:** WebSphere Transcoding Publisher 装置設定プロファイルで定義されているとおりの、任意の有効なデバイス・タイプが許可されています。

デフォルトのネットワーク・タイプには、以下のオプションのいずれかを選択することができます。

- GENERIC\_WIRELESS : 任意のワイヤレス・ネットワーク (事前定義デフォルト)
- GENERIC\_DIAL : ダイアルアップ・ネットワーク
- LAN : 直接接続または LAN

注: 通常は、エンタープライズがデフォルトでサポートする最低帯域幅を持つネットワーク・タイプを選択する必要があります。

---

## リバース・プロキシとしての認証プロキシの構成

認証プロキシ・モードで Everyplace Suite の Authentication Server を使用している場合、リバース・プロキシとして認証プロキシを構成しなければなりません。この構成では、認証プロキシはクライアント要求を受け入れて、それらの要求を別のサーバーに発送します。認証プロキシは、クライアントに対して、コンテンツ・サーバーのように見え、クライアントは、その要求が別のサーバーに送信されたことを認識しません。リバース・プロキシの構成について、詳しくは、「*Edge Server Caching Proxy (Web Traffic Express) User's Guide*」を参照してください。これは、<http://www.ibm.com/software/webservers/edgeserver/library.html> にあります。

CD 番号 8 に使用可能な 2 つのサンプル構成ファイルがあり、Authentication Server の構成の手助けとなります。認証プロキシ・モードと透過プロキシ・モードの両方にそれぞれ 1 つずつあります。ファイルは、以下のとおりです。

- `ibmproxy_ap.conf` - 認証プロキシ
- `ibmproxy_tp.conf` - 透過プロキシ

68ページの図10 には、リバース・プロキシとして認証プロキシの構成を示しています。

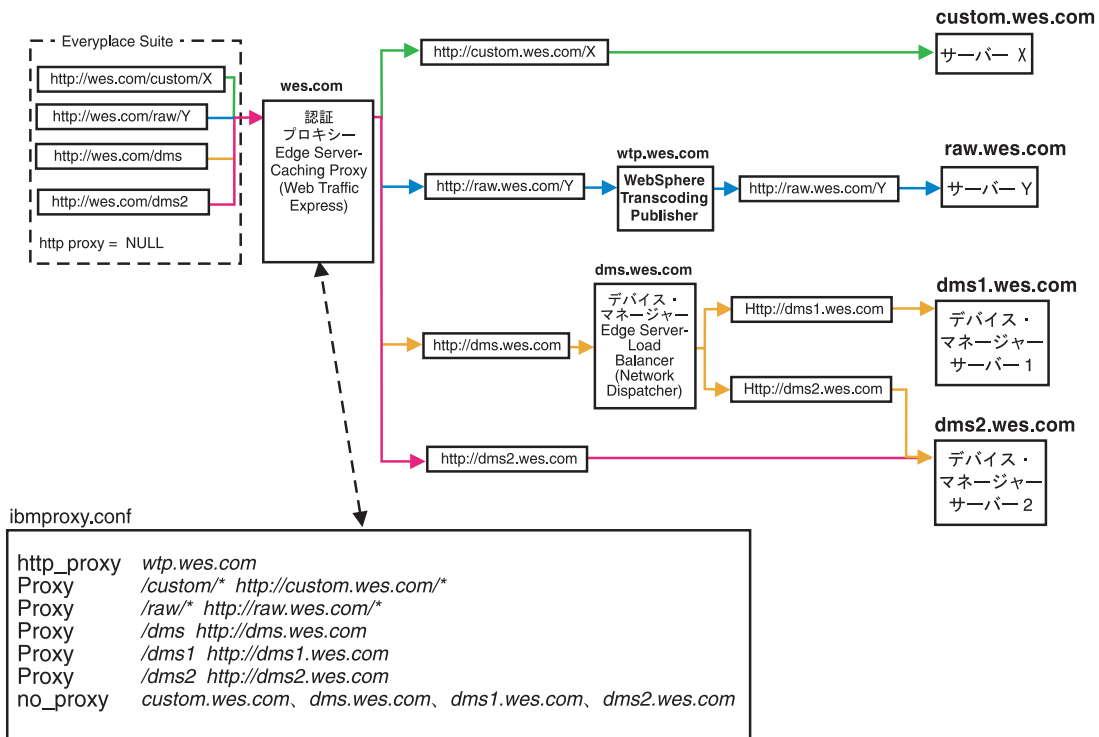


図 10. リバース・プロキシとしての認証プロキシの構成

この図の `ibmproxy.conf` 部分に示されている、`proxy` ステートメントは、認証プロキシ (`wes.com`、上図) からアプリケーション・サーバーに Everyplace Suite クライアント要求を送送するために使用されます。アプリケーションで使用する個別の URL ごとに `ibmproxy.conf` ファイルに `proxy` ステートメントを作成しなければなりません。 `proxy` ステートメントは、認証プロキシ・パス名 (たとえば、`/custom/*`、上記) および個別の URL (`http://custom.wes.com/*`、上記) から構成されます。 Caching Proxy は、Everyplace Suite ドメインの URL を、認証プロキシを介して、そのサーバー上の実際のコンテンツまたはアプリケーションにマップします。

要求が、認証プロキシを通過した後に変換を使用するかどうかを示す、2 つの `proxy` ステートメントもさらに作成する必要があります。

1. `ibmproxy.conf` ファイル内の最初の `proxy` ステートメントは、**http\_proxy** ステートメントでなければなりません。このステートメントは、トランスコーダーを通過する要求に対して使用され、デフォルトの Everyplace Suite トランスコーダー (`wtp.wes.com`、上図) として使用される WebSphere Transcoding Publisher インスタンスのホスト名から成ります。



2. `ibmproxy.conf` ファイル内の最後の `proxy` ステートメントは、**no\_proxy** ステートメントでなければなりません。このステートメントは、トランスコーダー (たとえば、Tivoli Personalized Services Manager デバイス・マネージャー機能、MQSeries Everyplace、または任意のカスタム・コンテンツ・サービス) を通過しない要求に対して使用されます。図の `ibmproxy.conf` 部分の最終行に示されている、このステートメントは、ドメインのリストから成り、Caching Proxy がこれらのドメインに対する **http\_proxy** ディレクティブをオーバーライドするようにします。

## 宛先変更に必要な追加構成

宛先変更が発生するのは、ロード・バランスを取ったり、別のサーバーからの情報またはサービスを取得したりするために、クライアント要求が別のサーバーに経路指定される場合です。Everyplace Suite 単一サインオン機能を保守するには、宛先変更されたターゲット URL が、認証プロキシと同じホストでなければなりません。

たとえば、ユーザーがデバイス管理操作を要求して、その要求を実行できる複数のデバイス管理サーバー (Load Balancer が管理) が存在する場合、宛先変更される要求は、認証プロキシを介して元に経路指定されて戻されなければなりません。この機能を使用可能にするためには、WebSphere Application Server の構成時に発生する、デバイス・マネージャー・サーバーの作成時に、認証プロキシの URL、**authProxyDmsUrl** に対してパラメーター値を指定しなければなりません。

登録時に、デバイス・マネージャーは、デバイスを宛先変更しようとする場合、アプリケーション・サーバーを検査して、**authProxyDmsUrl** が定義されているかどうか判別します。これが定義されている場合、デバイス・マネージャーは、**authProxyDmsUrl** に指定されているパラメーター値を使用して、宛先変更 URL を作成します。

**authProxyDmsUrl** が指定されていない場合、デバイス・マネージャーは、通常どおりに宛先変更 URL を計算します。

宛先変更時に、特に認証プロキシ・サポートのために計算された宛先変更 URL により、デバイスは認証プロキシを介して、正しい宛先である、通常は Tivoli Personalized Services Manager のサブスクリプション・サービスまたは特定のデバイス・マネージャー・サーバーに再度、経路変更されることとなります。

デバイス・マネージャーの認証および宛先変更の処理方法について、詳しくは、「*Device Manager: Planning and Installation*」を参照してください。

## Authentication Server が RADIUS および active session table server にアクセスできるようにする

Authentication Server をインストールした後で、ネットワーク・アクセス・サーバー (NAS) パスワードが SHARED\_SECRET Authentication Server 項目に一致するように、Tivoli Personalized Services Manager を構成する必要があります。この構成によって、Authentication Server がクライアントとして RADIUS および active session table server に追加され、Authentication Server が RADIUS および active session table server にア

クセスできるようになります。必要であれば、Directory Management Tool を使用して SHARED\_SECRET Authentication Server 項目の値を検索することができます (Directory Management Tool の使用の詳細については、59ページの『SecureWay Directory における Authentication Server 情報の構成』を参照してください)。SHARED\_SECRET 項目を検索するために必要なパラメーターは、以下のとおりです。

- settingID=RADIUS\_SHARED\_SECRET
- cid=common
- sys=wep
- sys=SDP、<ユーザーの接尾部>

以下のように Tivoli Personalized Services Manager を構成します。

1. Tivoli Personalized Services Manager Director Tool を使用して、RADIUS クライアントを追加し、Authentication Server が RADIUS サーバーにアクセスできるようにする。これを実行するには、次のようにします。
  - a. 「ディレクター・ツール (Director Tool)」をオープンして、「**TISM**」をダブルクリックする。
  - b. 「**RADIUS**」を選択した後、「RADIUS」ツリー・ビューを展開する。
  - c. 「クライアント (**Clients**)」を選択する。
  - d. 「クライアント (**Clients**)」を右クリックした後、「追加 (**Add**)」を選択する。
  - e. 以下のデータを入力してください。
    - フレーム ID および NASID=Authentication Server IP アドレス
    - NAS 名=Authentication Server のホスト名
    - NAS パスワード値=RADIUS\_SHARED\_SECRET の値
    - 残りの引数には、デフォルトを選択してください。
  - f. 「追加 (**Add**)」をクリックする。
  - g. 以下のように RADIUS サーバーを再始動する。
    - 1) Tivoli Personalized Services Manager RADIUS サーバーから、su - tsmuser コマンドを入力する (Oracle database の場合は、root ユーザー ID を入力してください)。
    - 2) コマンド cd /usr/TivTSM/radius/bin を入力する。
    - 3) "./reload\_radius\_db2.ksh" スクリプトを実行する。(Oracle database の場合は、コマンド "./reload\_radius.ksh" を使用してください。)
2. 以下のように Tivoli Personalized Services Manager active session table を変更します。
  - a. active session table コンソールから、exit コマンドを入力する。
  - b. cd/usr/TivTSM/ast/bin コマンドを入力する。

- c. active session table server の *AST.properties* ファイルを変更して、Authentication Server の IP アドレスを、active session table server のクライアント・リストに追加する。
  - d. */ASTServer.ksh* スクリプトを入力して、active session table server を再始動する。
3. 以下のように Authentication Server を停止した後、再始動する。
    - a. (*ps --ef | grep ibmproxy*) コマンドを入力して、Caching Proxy プロセスがあるかどうかを検査する。
    - b. Caching Proxy プロセスが検出された場合は、*stopsrc -s ibmproxy* または *kill -9 <process id>* コマンドを入力して、プロセスを停止する。
    - c. *ibmproxy* コマンドを入力して、Authentication Server を再始動する。

## Solaris の認証プロキシ・エラー・メッセージ

Solaris で認証プロキシの構成を終了した後、Caching Proxy コンソールを検査して、エラー・メッセージ (詳しくは、

<http://www.ibm.com/software/webservers/edgeserver/library.html> の「Edge Server Caching Proxy User's Guide」を参照してください) をログに記録します。エラー・メッセージが発生すると、Caching Proxy プロセスを強制終了して、再始動する必要があります。認証プロキシを再構成する場合も、その都度 Solaris システムをシャットダウンして再始動する必要があります。

---

## 操作タスクの実行

Authentication Server の *authserv* コマンド行ユーティリティーを使用して、その実行中に Authentication Server プラグインを制御してモニターすることができます。セキュリティ上の理由から、ユーティリティーは、Authentication Server と同じシステムで実行されなければなりません。*authserv* ユーティリティーにより、Authentication Server の中断および再開、構成の設定のリフレッシュ、および操作統計の表示など、特定の操作タスクを、Authentication Server において実行させることができます。

*authserv* プログラムの構文は以下のとおりです。

```
authsrv [-?| -help] [-p:serverPort] [funcname[args,.,,]] ]
```

引き数は以下のとおり。

- *--?* または *--help*: プログラムについてのヘルプ情報を表示する。*help* 関数名を発行すると、このサーバーでサポートされている関数のリストが表示されます。
- *--p*: サーバーに接続する場合の TCP ポートを設定する。ポートは、*ibmwesas.conf* 内に構成されます。デフォルト・ポート 9734 が使用されます。
- *funcname*: サーバーで実行される関数。詳しくは、72ページの表7 を参照してください。

- *args*: 関数の任意の引き数。

コマンド行から関数名を指定すると、その関数はサーバーに送信されます。応答および出力を受信すると、クライアントはセッションを終了して、自分自身も終了します。

関数名もヘルプ・オプションも指定していない場合、プログラムは、サーバーとのセッションを確立し、標準入力 (stdin) から読み込むコマンド・ループに入り、ユーザー側からオプション引き数を指定した関数名が入力されるのを待ちます。以下の関数名のいずれかを指定して、プログラムを終了することができます。

`quit`

または

`exit`

*authserv* プログラムを使用して、以下の操作タスクを実行することができます。

表 7. *authserv* プログラムについての操作タスク

| 関数名                       | 引き数<br>(複数の場合もある)      | 説明                                                                                                                                                                                                                                                   |
|---------------------------|------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>suspend</code>      | [Retry-After 遅延時間 (秒)] | Authentication Server インスタンスの通常の操作を停止する。受け渡されたとおりに <code>Retry-After</code> 値を指定すると、中断状態の間に受信された要求はいずれも 503 状況コードで拒否されます。値が何も指定されていない場合は、デフォルトの <code>Retry-After</code> 値が使用されます。                                                                   |
| <code>resume</code>       |                        | 中断後に Authentication Server インスタンスの通常の操作を開始する。                                                                                                                                                                                                        |
| <code>refresh</code>      | [構成ファイルのパス]            | 指定された構成ファイルおよび SecureWay Directory を強制読み込みして、Authentication Server のアクティブ構成設定を更新する。構成ファイルが指定されていない場合は、SecureWay Directory 読み込みしか実行されません。Refresh は、Authentication Server を暗黙的に中断します。Caching Proxy 設定をリフレッシュするには、Caching Proxy をそれぞれシャットダウンしなければなりません。 |
| <code>display</code>      |                        | 操作統計を戻す。                                                                                                                                                                                                                                             |
| <code>flush</code>        |                        | すべてのユーザーに対するセッション・キャッシュをフラッシュする。                                                                                                                                                                                                                     |
| <code>start_daemon</code> |                        | active session table のクリーンアップ・デーモンを開始する。                                                                                                                                                                                                             |
| <code>stop_daemon</code>  |                        | active session table のクリーンアップ・デーモンを停止する。                                                                                                                                                                                                             |
| <code>help</code>         |                        | サーバーでサポートされている関数のリストを戻す。                                                                                                                                                                                                                             |

表 7. *authserv* プログラムについての操作タスク (続き)

|      |  |                           |
|------|--|---------------------------|
| quit |  | クライアントに関するセッションを強制的に終了する。 |
|------|--|---------------------------|

操作コマンドが失敗した場合は、その失敗に関する情報がコマンド行コンソールまたは Caching Proxy コンソールのいずれかに報告されます。



---

## 第5章 Everyplace Suite の構成および管理

この章では、Everyplace Suite についての各種管理用タスクの実行について説明します。ここでは、加入者の登録、モバイル機器の追加、Tivoli Personalized Services Manager の構成、SecureWay Directory および管理パスワードの変更、Everyplace Administration Console の使用、ポート番号の変更、およびトラブルシューティングについて説明します。すべての Everyplace Suite コンポーネントについての資料の検索方法についても説明しています。

---

### Everyplace Suite コンポーネントの資料の検索方法

本書では、各種 Everyplace Suite コンポーネントの構成および使用に特定した情報は提供していません。Everyplace Suite の各コンポーネントごとに独自の資料を提供して、ユーザーがそのコンポーネントを管理および使用する手助けをします。特定のコンポーネントについての詳しい説明が必要である場合は、本節の該当する資料をご参照ください。

**注:** Everyplace Suite コンポーネントをインストールする場合は、37ページの『第3章 Everyplace Suite のインストール』のインストール手順に従うことが重要です。Everyplace Suite におけるコンポーネントのインストール要件は、コンポーネントによって異なる可能性があるため、コンポーネントの資料の独立したインストール手順には従わないでください。

次のリストに、すべての Everyplace Suite コンポーネントについての資料の検索方法について説明しています。ほとんどの場合、リストにある Web サイトにその特定のバージョンについての完全な現在の情報があります。コンポーネントごとのオンライン・ヘルプを介して、多くの資料にアクセスすることができます。Everyplace Suite の Readme ファイルにある、追加および更新情報も検索することができます。

### Everyplace Authentication Server

59ページの『第4章 Authentication Server の構成』を参照してください。

### Everyplace Wireless Gateway (バージョン 1.1)

インストールするにあたって、「*Everyplace Wireless Gateway Administrator's Guide*」を含む完全な資料は、次のサイトの CD 番号 7 にあります。

- </ewg/docs/en/cdread.htm>

詳しくは、以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/pvc/enterprise>

## MQSeries Everyplace for Multiplatforms (バージョン 1.1)

インストールするにあたって、資料は、以下のサイトの CD 番号 4 にあります。

- /mqe/read\_me.txt

以下の資料は、/mqe ディレクトリーで pdf ファイルとして見付けることができます。

- ReadmeFirst.pdf
- Introduction.pdf
- ProgrammingGuide.pdf
- ProgrammingReference.pdf

詳しくは、以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/mqseries/library/#books>

## Edge Server Load Balancer (バージョン 1.0)

インストールするにあたって、資料は、以下のサイトの CD 番号 6 にあります。

- /wscs/Docs/index.htm

インストール後、「*User's Guide*」およびその他の資料は、以下のディレクトリーで見つけることができます。

- AIX の場合 : /usr/lpp/nd/documentation
- Solaris の場合 : /opt/nd/documentation

詳しくは、以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/webservers/edgeserver/library.html>

## Edge Server Caching Proxy (バージョン 1.0)

インストールするにあたって、資料は、以下のサイトの CD 番号 6 にあります。

- /wscs/Docs/index.htm

詳しくは、以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/webservers/edgeserver/library.html>

## Tivoli Personalized Services Manager (バージョン 1.1)

**注:** ここでのリンクは、英語版の資料を指しています。その他の言語も使用可能です。

パスの /en/ 部分を変更して、その他の言語の資料にアクセスすることができます (たとえば、日本語の場合は /jpl/ となります)。

インストールにあたって、AIX および Solaris の両システムの完全な資料は、CD 番号 8 にあります。

- /tsm/doc/en/index.htm

この index ファイルには、完全な製品資料へのリンクがあります。



製品ライブラリーに含まれていない、追加の製品情報もあります。

- [/tsm/doc/en/README.htm](#)

インストール後、以下のロケーションで完全な資料を見つけることができます。

AIX システムの場合：

- 物理アドレス：[/opt/TivDMS/doc/en/index.htm](#)
- URL：[http://server\\_name/doc/en/index.htm](http://server_name/doc/en/index.htm)

ここで、*server\_name* は、Tivoli Personalized Services Manager のインストール先のコンピューターです。

Solaris システムの場合：

- 物理アドレス：[/usr/TivDMS/doc/en/index.htm](#)
- URL：[http://server\\_name/doc/en/index.htm](http://server_name/doc/en/index.htm)

ここで、*server\_name* は、Tivoli Personalized Services Manager のインストール先のコンピューターです。

## デバイス・マネージャー機能

インストールにあたって、AIX および Solaris の両システムの完全な資料は、CD 番号 8 にあります。

- [/dms/doc/en/index.htm](#)

この索引ファイルには、完全な製品資料へのリンクがあります。

製品ライブラリーに含まれていない、追加の製品情報もあります。

- [/dms/doc/en/dmsrbdy.htm](#)

デバイス・マネージャー機能のインストール後、以下のロケーションで完全な資料を見つけることができます。

AIX システムの場合：

- 物理アドレス：[/usr/lpp/TivDMS/doc/en/index.htm](#)
- URL：[http://server\\_name/dmsserver/en/index.htm](http://server_name/dmsserver/en/index.htm)

ここで、*server\_name* は、デバイス・マネージャーのインストール先のコンピューターです。

Solaris システムの場合：

- 物理アドレス：[/opt/lpp/TivDMS/doc/en/index.htm](#)
- URL：[http://server\\_name/dmsserver/en/index.htm](http://server_name/dmsserver/en/index.htm)

ここで、*server\_name* は、デバイス・マネージャーのインストール先のコンピューターです。

## WebSphere Transcoding Publisher (バージョン 1.1.2)

**注:** ここでのリンクは、英語版の資料を指しています。その他の言語も使用可能です。パスの /en/ 部分を変更して、その他の言語の資料にアクセスすることができます (たとえば、日本語の場合は /jpn/ となります)。インストールするにあたって、資料は、以下のサイトの CD 番号 7 にあります。

- /wtp/doc/en/readme.htm
- /wtp/doc/en/index.htm

この索引ファイルには、多くの Transcoding Publisher 資料へのリンクが含まれています。これらの資料では、計画、インストールおよび構成、ならびに管理について説明しています。

インストール後、WebSphere Transcoding Publisher Administration Console の「ヘルプ (Help)」メニューから WebSphere Transcoding Publisher の「Administrator's Guide」および「Developer's Guide」をオープンすることができます。

詳しくは、以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/webservers/transcoding/library.html/>

## Everyplace Synchronization Manager (バージョン 1.1)

インストールするにあたって、資料は、以下のサイトの CD 番号 11 にあります。

- README.txt
- /esm/docs/Getting started guide.pdf
- /esm/docs/Everyplace Sync Manager(ce).pdf
- /esm/docs/Everyplace Sync Manager(palmOS).pdf

## IBM DB2 ユニバーサル・データベース -- エンタープライズ版 (バージョン 7.1)

以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/data/db2/library/>

## WebSphere Application Server -- スタンダード版 (バージョン 3.5)

インストールするにあたって、資料は、以下のサイトの CD 番号 5 にあります。

- /was/sun/spool/WSdocen/reloc/IBMWebAS/web/InfoCenter/index.htm
- /was/aix/README.FIRST
- /was/sun/spool/README.FIRST

詳しくは、以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/library.html>

## IBM HTTP Server (バージョン 1.3.12)

以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/websevers/httpsevers/library.html>

## SecureWay Directory (バージョン 3.2)

インストールするにあたって、資料は、以下のサイトの CD 番号 4 にあります。

- /swd/aix/readme.ldap
- /swd/aix/server.txt
- /swd/aix/server.htm
- /swd/aix/addendum.htm
- /swd/aix/addendum.txt
- /swd/aix/client.htm
- /swd/aix/client.txt

詳しくは、以下の Web サイトを参照してください。

- <http://www.ibm.com/software/network/directory/library/>

---

## 加入者の登録およびモバイル機器の追加

Tivoli Personalized Services Manager または Everyplace Wireless Gateway を使用して、Everyplace Suite により加入者 (ユーザーとも呼ばれる) を登録することができます。Tivoli Personalized Services Manager および Everyplace Wireless Gateway の両方をインストールする場合は、Tivoli Personalized Services Manager で加入者を定義しなければなりません。そうすれば、ゲートキーパーを使用して、Everyplace Wireless Gateway で加入者を表示することができます。Everyplace Suite ドメイン (独立型コンポーネント) の唯一のコンポーネントとして、Everyplace Wireless Gateway をインストールする場合は、ゲートキーパーで加入者を定義することができます。

Tivoli Personalized Services Manager または Everyplace Wireless Gateway を使用して、モバイル機器を追加することができます。ゲートキーパーを使用して、Everyplace Wireless Gateway によりモバイル機器を追加します。

加入者およびデバイスの情報については、以下の資料で見つけることができます。

- Everyplace Wireless Gateway による加入者の登録およびモバイル機器の追加については、「*Everyplace Wireless Gateway Administrator's Guide*」が利用できます。この資料は以下の URL にあります。

*doch*<http://www.ibm.com/pvc/enterprise/mobile/references.shtml>

- Tivoli Personalized Services Manager による加入者の登録については、「*Tivoli Personalized Services Manager Operations and Administration Guide*」が利用できません。

- Tivoli Personalized Services Manager によるデバイスの追加については、以下のデバイス・マネージャー・プラグインの注記が利用できます。
  - デバイス・マネージャー: PalmOS プラグインに関する注記
  - デバイス・マネージャー: Windows CE プラグインに関する注記
  - デバイス・マネージャー: Aero 8000 プラグインに関する注記
  - デバイス・マネージャー: NetVista Internet Appliance プラグインに関する注記

---

## SecureWay Directory パスワードの変更

SecureWay Directory のユーザー ID およびパスワードは、Everyplace Suite のインストール時に設定されます。パスワードは、SecureWay Directory にアクセスする Everyplace Suite コンポーネントごとに同じものであっても、異なるものであっても構いません。

**注:** SecureWay Directory サーバーにおいてパスワードを変更した場合は、Everyplace Suite ドメインのその他のすべてのサーバーについても、このパスワードを変更しなければなりません。そうしないと、それらのサーバーから SecureWay Directory にアクセスすることができなくなります。

次のコマンド行ステートメントを使用して、SecureWay Directory のパスワードを変更することができます (SecureWay Directory のユーザー ID は変更できません)。

AIX の場合 :

```
cd /usr/lpp/IBMEPS.Inst
./ChangePassword.sh 'component' 'userid' 'current password'
'new password' 'confirm new password'
```

Solaris の場合 :

```
cd /opt/IBMEPSIn
./ChangePassword.sh 'component' 'userid' 'current password'
'new password' 'confirm new password'
```

たとえば、WebSphere Transcoding Publisher タイプの SecureWay Directory のパスワードを変更したい場合は以下のようにします。

```
./ChangePassword.sh Transcoding old_uid old_password new_password new_password
```

Tivoli Personalized Services Manager のパスワードを変更するには、以下のように入力します。

```
./ChangePassword.sh Tivoli old_uid old_password new_password new_password
```

あるいは、以下のように入力することもできます。

```
./ChangePassword.sh
```

次に、**Enter** を押します。上記のパラメーターごとに、プロンプトが順に出されます。

対応するコンポーネント・キーワードを使用して、以下のコンポーネントのパスワードを変更することができます。

ゲートウェイ -- Everyplace Wireless Gateway サーバー  
ゲートキーパー -- Everyplace Wireless Gateway ゲートキーパー  
変換 -- WebSphere Transcoding Publisher  
Tivoli -- Tivoli Personalized Services Manager  
プロキシ -- Everyplace Authentication Server  
コンソール -- Everyplace Administration Console  
アンインストール -- Everyplace Suite アンインストール・プログラム

注: SecureWay Directory のパスワードは、Netscape ブラウザーを使用して変更することができます。この実行手順については、

<http://www.ibm.com/software/network/directory/library/> において、オンラインの SecureWay Directory 資料で見つかります。

SecureWay Directory のユーザー ID およびパスワードを管理者のユーザー ID およびパスワードと混同しないでください。管理者のユーザー ID およびパスワードも Everyplace Suite のインストール時に設定されます (これらは、インストール済みの Everyplace Suite コンポーネントにアクセスする場合に使用します)。該当するコンポーネントのオンライン・ヘルプにおける以下の手順に従って、そのコンポーネントの管理コンソールからコンポーネントの管理者パスワードを変更することができます。詳しくは、75ページの『Everyplace Suite コンポーネントの資料の検索方法』を参照してください。

---

## active session database に対する Tivoli Personalized Services Manager の構成

Everyplace Suite セッション・トラッキングが機能するようにするには、Tivoli Personalized Services Manager のトランザクション・プロパティ・ファイル (/usr/TivTSM ディレクトリー・ツリー内の Transactions\_xx\_XX.properties) の 2 つの構成パラメーターが正しく構成されていなければなりません。このファイルの **MinDBConnections** および **MaxDBConnections** の設定が、インストールの内容に対して適切であることを確認してください。設定については、想定される加入者数および配置される active session table server の数に基づいていなければなりません。

使用したい active session table クライアント・マシンの IP アドレスを、  
/usr/TivTSM/ast/bin/AST.properties ファイル内の次の行に追加してください。例:  
Accept = coleg1, 127.0.0.1, 9.130.80.227, 9.130.84.53

---

## Everyplace Wireless Gateway が RADIUS および active session table server にアクセスできるようにする

Everyplace Wireless Gateway をインストールした後で、ネットワーク・アクセス・サーバー (NAS) パスワードが Everyplace Wireless Gateway SHAREDSECRET 項目に一致するように、Everyplace Wireless Gateway と Tivoli Personalized Services Manager の両方を構成する必要があります。この構成によって、Everyplace Wireless Gateway が RADIUS および active session table server にクライアントとして追加され、Everyplace Wireless Gateway が RADIUS および active session table server にアクセスできるようになります。必要であれば、Directory Management Tool を使用して SHAREDSECRET Everyplace Wireless Gateway 項目の値を検索することができます (Directory Management Tool の使用の詳細については、59ページの『SecureWay Directory における Authentication Server 情報の構成』を参照してください)。SHAREDSECRET 項目を検索するために必要なパラメーターは、以下のとおりです。

- cn=<Gateway リソース・ホスト名>
- cn=root, sys
- sys=ewg
- sys=SDP、<ユーザーの接尾部>

次に、**radiussharedsecret**: 項目を検索します。

構成は、Everyplace Wireless Gateway 内の Gateway リソースの作成中と作成後に行なわれます。

### Gateway リソース作成中の構成

Everyplace Suite 環境で Everyplace Wireless Gateway の Gateway リソースを作成する際は、以下の構成ステップを実行する必要があります。

1. Everyplace Wireless Gateway を Everyplace Suite モードで実行するように構成する。
2. Everyplace Wireless Gateway を RADIUS を使用して認証するように構成する。  
Everyplace Suite モードがオンになっている場合、これは、デフォルトの選択でなければなりません。
3. ワイヤレス・アクセス・プロトコル (WAP) と非 WAP リソースの両方を構成して、ユーザーの妥当性検査を実行する。
4. WAP リソースの場合は、Authentication Server またはその load balancer を、WAP ゲートウェイからの HTTP トラフィックに対するネクスト・ホップとして構成する。

Gateway リソースの作成の詳細については、「*Wireless Gateway Administrator's Guide*」を参照してください。

## Gateway リソース作成後の構成

Everyplace Wireless Gateway をインストールし、Gateway リソースを作成した後で、以下の構成ステップを実行してください。

1. Gateway リソースのデフォルト値を、1812 から Tivoli Personalized Services Manager の RADIUS listen ポートの値に変更する。listen ポートのデフォルト値は、1645 です。
2. RADIUS サーバーに対する SHAREDSECRET 設定を指定する。
3. Tivoli Personalized Services Manager Director Tool を使用して、RADIUS クライアントを追加し、Everyplace Wireless Gateway が RADIUS サーバーにアクセスできるようにする。これを実行するには、次のようにします。
  - a. 「**TISM**」をダブルクリックする。
  - b. 「**RADIUS**」を選択した後、「RADIUS」ツリー・ビューを展開する。
  - c. 「**クライアント (Clients)**」を選択する。
  - d. 「**クライアント (Clients)**」を右クリックした後、「**追加 (Add)**」を選択する。
  - e. 以下のデータを入力してください。
    - フレーム ID および NASID=Everyplace Wireless Gateway IP アドレス
    - NAS 名=Everyplace Wireless Gateway ホスト名
    - NAS パスワード=RADIUSSHAREDSECRET の値
    - 残りの引数には、デフォルト値を選択してください。
  - f. 「**追加 (Add)**」を選択する。
  - g. 以下のように RADIUS サーバーを再始動する。
    - 1) Tivoli Personalized Services Manager RADIUS サーバーから、su - tsmuser コマンドを入力する (Oracle database の場合は、root ユーザー ID を入力してください)。
    - 2) コマンド cd /usr/TivTSM/radius/bin を入力する。
    - 3) "./reload\_radius\_db2.ksh" スクリプトを実行する。(Oracle database の場合は、コマンド "./reload\_radius.ksh" を使用してください。)
4. 以下のように Tivoli Personalized Services Manager active session table を変更する。
  - a. active session table コンソールから、exit コマンドを入力する。
  - b. cd/usr/TivTSM/ast/bin コマンドを入力する。
  - c. active session table server の *AST.properties* ファイルを変更して、Everyplace Wireless Gateway の IP アドレスを、active session table server のクライアント・リストに追加する。
  - d. /ASTSever.ksh スクリプトを入力して、active session table server を再始動する。
5. 以下のように Everyplace Wireless Gateway を停止した後、再始動する。
  - a. コマンド行から、stopsrc -s w gated コマンドを入力してプロセスを停止する。

- b. `ps -ef | grep w gated` コマンドを実行して、プロセスが停止していることを確認する。
- c. `startsrc -s w gated` コマンドを入力して、Everyplace Wireless Gateway を再始動する。

注: ゲートウェイは、Gatekeeper を介して始動、停止することもできます。

---

## Everyplace Wireless Gateway に対するユーザー区分フラグの設定

WebSphere Everyplace Suite LDAP スキーマには、組のユーザーを分類するときを使用できる 2 つのフィールドが含まれます。これらのフィールドは、真 (TRUE) または偽 (FALSE) のいずれかに設定することができます。Gateway ツールは、これらの 2 つのフィールドを使用してユーザー・リスト照会の範囲を削減するため、この区分によって、Everyplace Wireless Gateway の Gatekeeper ツールを使用しているときに表示するユーザーの数をより少なくすることができます。フィールドは、以下のとおりです。

- **ibm-WGclient:** このフィールドは、ユーザーを Everyplace Wireless Gateway のユーザーとして分類します。Gatekeeper は、このフィールドが真に設定されているユーザーだけを表示します。
- **ibm-WAPclient:** このフィールドは、ユーザーをワイヤレス・アクセス・プロトコル (WAP) ユーザーとして分類します。Gatekeeper は、このフィールドが真に設定されているユーザーの WAP 特性だけを表示します。

デフォルトでは、ユーザーが登録されると、これらの 2 つのフィールドは、Tivoli Internet Services Manager LDAP プロビジョニング・ゲートウェイ (LDAPGateway) によって、LDAPGateway.properties ファイルの設定を介して真に設定されます。

これらのフィールドの設定は、ユーザー・プロファイル拡張の定義などの技法や、ユーザー・プロファイル拡張のプロビジョニングを行なう LDAPGateway を使用して、カスタマイズすることができます。LDAPGateway およびユーザー・プロファイル拡張の詳細については、Tivoli Internet Services Manager の資料を参照してください。

---

## Everyplace Administration Console の使用

Everyplace Administration Console は、インストール済みの Everyplace Suite コンポーネントの管理コンソールを立ち上げるための集中方式を提供します。起動されると、Everyplace Administration Console は SecureWay Directory にアクセスして、インストール済みコンポーネントおよびそれらがインストールされているサーバーに関する情報を取得し、Everyplace Administration Console に関する情報を表示します。

ホスト名およびポート番号が、対応する Everyplace Suite コンポーネントの隣の右ペインに表示されます。Java ベースの管理コンソール (WebSphere Transcoding Publisher や WebSphere Application Server など) は、リモート・ホストにインストールされていてもリストされません。



ユーザーがコンポーネントおよびサーバーを選択すると、Everyplace Administration Console は、選択したサーバーでコンポーネントの管理コンソールを立ち上げます。

## Everyplace Administration Console の開始

Everyplace Administration Console を開始するには、以下の 3 通りの方法があります。

- Everyplace Suite インストール・プロセスの最後でコンソールを開始するためのオプションが与えられます。
- インストール後、このコンソール・アイコンをクリックして、コンソールを開始できます。このアイコンは、インストール・プロセスで作成されたものです。AIX の場合、このアイコンは、`/home/admin_userID/wesconsole` にあり、Solaris の場合、`/export/home/admin_userID/wesconsole` にあります。ここで、`admin_userID` は Everyplace Administration Console インストール時に指定されたユーザー ID です。
- インストール後、以下のようにして、コマンド行からコンソールを開始することもできます。
  1. インストール時に指定された Administration Console のユーザー ID を使用してログオンする (Everyplace Administration Console は、ルート・ユーザー ID を使用して、開始することもできます)。
  2. 端末ウィンドウをオープンする。
  3. 以下のコマンドを実行する。
    - AIX の場合：

```
cd /usr/lpp/IBMEPS.Admin
./wesconsole.sh
```
    - Solaris の場合：

```
cd /opt/IBMEPSAd
./wesconsole.sh
```

Everyplace Administration Console は、ユーザー特権および前提条件のソフトウェアなど、すべての使用条件が正しいことを確認します。条件を満たしている場合、Everyplace Administration Console は、インストール済みの Everyplace Suite コンポーネントのリストを表示します。

## コンポーネント管理コンソールの立ち上げ

コンポーネント管理コンソールは、以下のようにして、Everyplace Administration Console から立ち上げることができます。

1. 立ち上げようとする管理コンソールを持つコンポーネントを選択する。コンポーネント・リストのそれ以外の部分はグレー化され、選択したコンポーネントがインストールされるサーバーのリストが表示されます。
2. コンポーネントの管理コンソールを立ち上げるために必要なコンポーネント・インスタンスを含むサーバーをダブルクリックする。

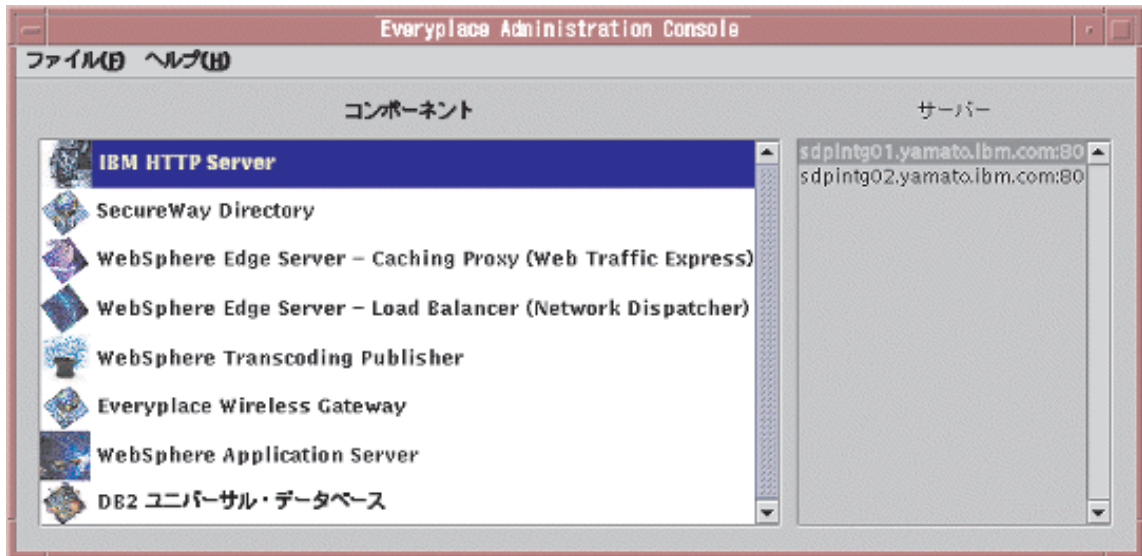


図 11. Everyplace Administration Console

## HTTP Server および Caching Proxy のポート番号の変更

Everyplace Administration Console を使用して、以下のように、インストール後に IBM HTTP Server および Caching Proxy のポート番号を両方とも変更することができます。

1. コンポーネントのリストから IBM HTTP Server または Caching Proxy を選択する。コンポーネントがインストールされている、すべてのサーバーのリストが、右手パネルに表示されます。
2. 該当するサーバーをクリックして、変更しようとするサーバーを強調表示する (名前をダブルクリックしないでください。ダブルクリックすると、そのコンポーネントの管理コンソールを立ち上げてしまいます)。
3. サーバー名を右クリックする (あるいは、**Shift-F10** キーを同時に押す)。これにより、選択したサーバーおよびポート番号がリストされたダイアログが表示されます。
4. 新規ポート番号を「**ポート番号 (Port Number)**」フィールドに入力してから、「**了解**」をクリックする。「**サーバー (Server)**」フィールドは編集できません。
5. 「**了解**」をクリックすると、新規ポート番号が Everyplace Administration Console のサーバーのリストに表示される。

## トラブルシューティング

Everyplace Administration Console によりコンポーネントの管理コンソールが立ち上がらない場合は、以下の条件を満たしているかどうか確認してください。

- ログイン・ユーザー ID に、SecureWay Directory サーバーにアクセスして、コンポーネントの管理コンソールを立ち上げるための必須特権があること。詳しくは、18ページの『SecureWay Directory のインストール計画』を参照してください。
- コンポーネントの前提条件であるソフトウェアがインストールされていること。詳しくは、25ページの『システム要件』を参照してください。
- Everyplace Administration Console 構成ファイル (AIX の場合は /usr/lpp/IBMEPS.Admin/suiteadmin.conf、Solaris の場合は /opt/IBMEPSAd/suiteadmin.conf) が使用可能であり、ユーザー ID、パスワード、および SecureWay Directory サーバー名がファイルに正しく設定されていること。
- SecureWay Directory サーバーが開始済みで、正しく接続されていること。



---

## 第6章 Everyplace Suite コンポーネントのアンインストール

Everyplace Suite コンポーネントは、いずれも、Everyplace Suite アンインストール・プログラムを使用して除去することができます。このプログラムにより、ユーザーは、除去する Everyplace Suite コンポーネントとサブコンポーネントの任意の組み合わせを選択することができます。アンインストール・プログラムを実行する、ローカル・サーバーにインストールされているコンポーネントしかアンインストールすることはできません。

**注:** Everyplace Suite アンインストール・プログラムを使って Everyplace Synchronization Manager をアンインストールすることはできません。Synchronization Manager のアンインストールの詳細については、Everyplace Suite 製品 CD (CD 番号 11) /esm/docs の資料を参照してください。

---

### アンインストール・プログラムの開始

アンインストール・プログラムを開始するには、コマンド行で以下のように入力します。

- AIX システムの場合 : /usr/lpp/IBMEPS.Inst/uninstall.sh
- Solaris システムの場合 : /opt/IBMEPSIn/uninstall.sh

---

### コンポーネントの選択およびアンインストール

Everyplace Suite コンポーネントをアンインストールするには、以下のステップに従います。

1. アンインストール・プログラムを開始すると、現在、インストールされているすべてのコンポーネントおよびそれに対応するサブコンポーネントのリストが表示されます。サブコンポーネントは、右側のパネルに表示されます。これらのサブコンポーネントは、個々に選択することができます。

**注:** 選択した任意のコンポーネントが、アンインストールの対象ではないその他のコンポーネントで必要な場合、アンインストールが行われる前に、この問題が通知されます。

2. サポートしているコンポーネント (IBM HTTP Server や WebSphere Application Server など) が、アンインストールしようとしているコンポーネントの前提条件として必要ではなくなると、それらのコンポーネントをアンインストールするオプションが与えられます。
3. アンインストールするコンポーネントをすべて選択したら、「次へ」ボタンをクリックします。アンインストール対象のすべてのコンポーネントおよびサブコンポーネントのリストが表示されます。アンインストールを続ける場合は、「アンインストール」ボタンをクリックします。

**注:** IBM DB2 ユニバーサル・データベース のアンインストールが許可されるには、Everyplace Suite ドメインで検出される、SecureWay Directory、Tivoli Personalized Services Manager、Everyplace Synchronization Manager、または Everyplace Wireless Gateway のインスタンスが存在しなければなりません。

4. 進行表示画面にアンインストールの進行状態が表示され、アンインストールがいつ完了したか通知されます。

すべてのアクションおよび結果は、アンインストール時に `/tmp/everypplace.log` ファイルに記録されます。このファイルには、問題の識別および解析について支援可能な一連の情報が含まれています。 `everypplace_install.trace` ファイルも `/tmp` ディレクトリ内で使用可能で、プログラム実行についての詳細事項が含まれています。上記のファイルは ASCII テキスト形式で、任意のテキスト・エディターを使用して表示させることができます。

アンインストール・プログラムは、どのカスタマー・データ・ファイルも除去しません。 Everyplace Suite コンポーネントのインストール時にインストールされたファイルのみを除去します。 Everyplace Suite インストール・プログラムを使ってインストールされていないコンポーネントは、正しくアンインストールされない可能性があります。

**注:** ユーザー ID およびグループ ID を使用する Everyplace Suite コンポーネントをアンインストールした後、何らかの問題が発生するのを避けるために、システムからこれらの ID を確実に削除してください。

---

## アンインストールおよび SecureWay Directory

アンインストール・プログラムは、残りのインストール済みコンポーネントで必要なコンポーネントを判別します。これを行うには、SecureWay Directory サーバーからの Everyplace Suite インストールおよび構成情報を検索します。したがって、Everyplace Suite 環境の整合性を保つためには、アクティブ SecureWay Directory サーバーが、アンインストール・プログラムの実行時に使用可能でなければなりません。

**注:** SecureWay Directory サーバーがアクティブでない状態でコンポーネントがアンインストールされた場合、システムの整合性が十分に機能せず、予期しない結果が発生する可能性があります。

## 特記事項

本書において、日本では発表されていない IBM 製品（機械およびプログラム）、プログラミングまたはサービスについて言及または説明する場合があります。しかし、このことは、弊社がこのような IBM 製品、プログラミングまたはサービスを、日本で発表する意図があることを必ずしも示すものではありません。本書で IBM ライセンス・プログラムまたは他の IBM 製品に言及している部分があっても、このことは当該プログラムまたは製品のみが使用可能であることを意味するものではありません。これらのプログラムまたは製品に代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等のプログラムまたは製品を使用することができます。ただし、IBM によって明示的に指定されたものを除き、これらのプログラムまたは製品に関連する操作の評価および検査はお客様の責任で行っていただきます。

IBM および他社は、本書で説明する特許権（特許出願中のものを含む）、商標権、または著作権を所有している場合があります。本書の提供は、これらの特許権、商標権、および著作権について、本書で明示されている場合を除き、実施権、使用权等を許諾することを意味するものではありません。実施権、使用权等の許諾については、下記の宛先に、書面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木 3 丁目 2-31  
AP 事業所  
IBM World Trade Asia Corporation  
Intellectual Property Law & Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

本書に対して、周期的に変更が行われ、これらの変更は、文書の次版に組み込まれます。IBM は、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation  
P.O. Box 12195  
3039 Cornwallis Road  
Research Triangle Park, NC 27709-2195  
USA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBMより提供されます。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手してください。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の損害賠償請求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は現れない場合があります。

---

## 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

|                        |           |
|------------------------|-----------|
| AIX                    | REDBOOKS  |
| DB2                    | RS/6000   |
| DB2 Universal Database | ThinkPad  |
| IBM                    | Tivoli    |
| SecureWay              | WebSphere |
| MQSeries               | WorkPad   |

以下の用語は、他社の商標です。

Sun、Sun Microsystems、Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。



Microsoft、Windows、Windows NT、Windows 98、Windows 95 ロゴ、および本書で参照される、その他の Microsoft 製品は、Microsoft Corporation の商標または登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標または登録商標です。





# 索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

## 【ア行】

アップグレード 35, 37  
宛先変更 69  
アンインストール 89  
移行、既存製品の 35  
イメージ、インストール 38  
インストール 37  
インストール CD 38  
インストール、エラー・ログ 55  
インストール、デバイス・クライアントの 56  
インストール前 18, 37  
インストール・イメージ 38  
インストール・ウィザード 48, 49  
インストール・モデル 15  
インターネット 1  
インターネット・サービス・プロバイダー 1, 4  
イントラネット 1  
インポート、LDIF ファイルの 21  
ウィザード、インストール 48, 49  
エラー 55  
エラー・メッセージ、認証プロキシ 71  
エラー・ログ 55  
オブジェクト・クラス 62

## 【カ行】

加入者およびデバイスの管理 2  
加入者の登録 79  
管理者のパスワード、変更 81  
企業の顧客 4  
クライアント、ワイヤレス 9, 56  
クライアントのインストール 56  
クラスター、サーバー 15  
計画 5, 35  
現行バージョンのリフレッシュ 35  
構成 37  
構成、Authentication Server の 22, 59  
コンテンツ処理 2  
コンテンツに基づいたルーティング 10

コンテンツ・プロバイダー 3  
コンポーネント 1  
    サポート 13  
    使用するコンポーネントの決定 3  
    資料 75  
    選択 51  
    前提条件 25  
    メイン 7

## 【サ行】

サーバー・クラスター 15  
最適化 2  
サポートするデバイス 33  
サポート・コンポーネント 13  
システム要件 25  
障害追及 55  
資料、コンポーネントの 75  
セキュリティ 2  
接続性 1  
前提条件 25  
    ディスク・スペース 30  
    表 31  
操作タスク 71  
ソフトウェア要件 25

## 【タ行】

対話式セッション・サポート 11  
ダウングレード 35, 37  
単一のユーザー・サインオン 8  
ディスパッチャー 11  
ディレクトリー構造、CD の 39  
デバイス、サポートする 33  
デバイスの追加 79  
デバイス・クライアントのインストール 56  
デバイス・タイプ、構成 66  
デバイス・マネージャー、Tivoli Personalized Services Manager 11, 56, 77  
展開例 3  
透過プロキシ 8  
同期 12  
ドメイン、Everyplace Suite 8

## [ナ行]

認証プロキシ 7  
認証プロキシ・エラー・メッセージ 71  
ネットワーク・タイプ、構成 66

## [ハ行]

ハードウェア要件 25  
パスワード  
  管理者の変更 81  
  SecureWay Directory の変更 80  
バックアップ  
  Everyplace Suite LDAP Directory 22  
  SecureWay Directory 22  
プロキシ、透過 8  
ポート番号、変更 86

## [ヤ行]

ユーザー ID 37, 52  
ユニバーサル・データベース、IBM DB2 14

## [ラ行]

リバース・プロキシ 67  
リフレッシュ  
  Everyplace Suite LDAP Directory 22  
  SecureWay Directory 22  
例、インストールの 15

## A

active session table 12, 22  
Administration Console 13, 84  
AIX 26  
Application Server, WebSphere 14  
Authentication Server 2  
  構成 22, 59  
  操作タスク 71  
  SecureWay Directory の構成 59  
Authentication Server, RADIUS および active session  
  table server へのアクセス 69  
authserv プログラム 71

## C

Caching Proxy 2, 10  
CD のディレクトリー構造 39

96 WebSphere Everyplace Suite: ご使用に際して

cdrom 48  
CD、インストール 38

## D

DB2 14, 52  
Directory Management Tool 59

## E

Edge Server 2  
Edge Server - Caching Proxy 10  
Edge Server - Load Balancer 10, 15  
Everyplace Administration Console 84  
  開始 85  
  定義 13  
Everyplace Administration コンソール  
  トラブルシューティング 86  
Everyplace Authentication Server 2, 7  
Everyplace Suite  
  アンインストール 89  
  インストールおよび構成 37  
  インストール・ステップ 49  
  コンポーネント 7  
Everyplace Suite LDAP Directory  
  バックアップ 22  
  リフレッシュ 22  
Everyplace Synchronization Manager 1, 12  
Everyplace Wireless Gateway 1, 8  
everyplace.log ファイル 55

## G

Gateway、作成 82

## H

HTTP Server 14

## I

IBM DB2 ユニバーサル・データベース 14  
IBM HTTP Server 14  
install.sh, command 49

## J

Java 開発キット 14  
JDK 14, 26

## L

LDAP 18  
LDIF ファイル 20  
LDIF、SecureWay Directory へのインポート 21  
Load Balancer 2, 10, 15

## M

MQSeries Everyplace 1, 10, 56

## N

Netscape Communicator 14, 37  
Netscape Navigator 14, 37  
Network Dispatcher 2, 10

## O

Oracle 52  
Oracle Database、インストール 40  
Oracle JDBC ドライバー 44, 48

## P

PTF の適用 27

## R

RADIUS 12, 22  
README ファイル  
    インストール・ウィザードからの表示 50  
    概説 37  
Redbooks 15, 35

## S

SecureWay Directory 18  
    情報共用オプション 18, 50  
    定義 13  
    パスワードの変更 80  
    バックアップ 22  
    リフレッシュ 22  
    LDIF のインポート 21  
settingID 62  
Solaris 26

Solaris、認証プロキシ・エラー・メッセージ 71  
suiteadmin.conf ファイル 86

## T

Tivoli Personalized Services Manager 2  
    インストール前の要件 23  
    カスタマー・ケア 11  
    定義 11  
    デバイス・マネージャー 11  
    メンバー・セルフ・ケア 11  
    active session table 12  
    Everyplace Suite イネーブラー 12  
Tivoli Personalized Services Manager 構成  
    構成 81  
Transcoding Publisher 2, 12

## W

Web Traffic Express 2, 10  
WebSphere Application Server 14  
WebSphere Transcoding Publisher 2, 12  
Wireless Client 9, 56  
Wireless Gateway 1







Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社

〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12